認知症の人と家族への援助をすすめる

第 36 回
全国研究集会 in 三重

抄　録

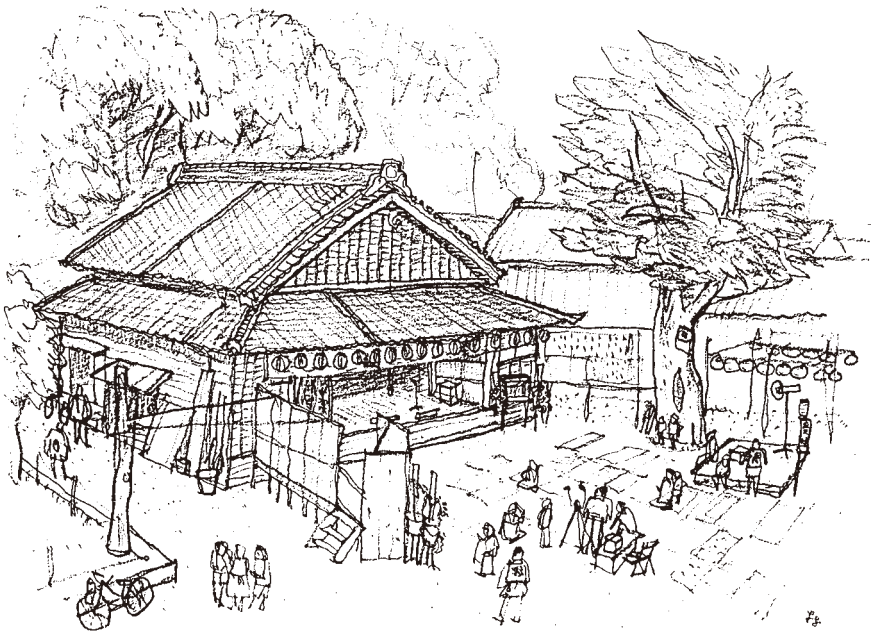
「ともに」
～忘れても一人ひとりが主人公～

日時 / 2020 年 10 月 25 日（日）

録画配信　　9：00 ～ 基調講演、事例発表 配信
　　12：00 ～ 俳句

ライブ配信　13：25 ～ パネルディスカッション ライブ配信

配信会場 / 三重県総合文化センター　レセプションルーム



鳥羽市　安楽島（あらしま）の舞台

主催　公益社団法人 認知症の人と家族の会　担当：三重県支部

Alzheimer's Association Japan

公益社団法人
認知症の人と家族の会

入会のご案内



介護職　医療職　介護家族　ご本人

認知症に関心のある方は どなたでも入会できます。

「つながる」ことの大切さ　会員の声

会報を仕事に役立てています
（京都府　A男さん　施設職員）

毎月届く会報には認知症のご本人やご家族の声が載っており、仕事の参考にしています。入会して寄り添うことの大切さがわかりました。

つどいで笑顔になれました
（宮城県　丹野智文さん　認知症当事者）

つどいで話をしてみると、みんな同じ病気、飲んでいる薬も同じ、なんだかうれしくなり、笑顔になりました。

何でも話せる仲間に出会えました
（鹿児島県　N子さん　介護者）

同じ立場の人たちと会い、何を話しても良いという安心感から思いを吐き出しました。また会えるのが待ち遠しいです。

「家族の会」理念

認知症になったとしても、介護する側になったとしても、人としての尊厳が守られ日々の暮らしが安穏に続けられなければならない。

認知症の人と家族の会は、ともに励ましあい助けあって、人として実りある人生を送るとともに、認知症になっても安心して暮らせる社会の実現を希求する。

「資料請求」「入会申し込み」は「家族の会」【TEL(050)5358-6580 FAX(075)205-5104】まで。
ホームページからも可能です。

http://www.alzheimer.or.jp/?page_id=246

目　次

目　　次 …… 1

開 催 要 綱 …… 2

プログラム …… 3

ごあいさつ　公益社団法人　認知症の人と家族の会　代表理事　鈴木　森夫 …… 4

基 調 講 演　「認知症の人とともに」

講演者：シルバー総合研究所理事長　認知症専門医　遠藤　英俊 …… 6

事 例 発 表　1　認知症でつながる・広がる社会関係（大阪府）　渋谷　美和 …… 8

2　デイサービスにおける認知症をもつ人の『だれかの役に立ちたい』を形に
ーくじら合唱団―（三重県）

有限会社ホワイト介護　長太の寄合所「くじら」　佐野　佑樹 …… 10

3　私の介護体験談　ゴーヤ様　（奈良県）　裕　　秀代 …… 12

4　写真で見る認知症介護の歴史の一断面（三重県）

津市認知症・在宅介護研究会　中道　和久 …… 14

5　私の介護体験談　（岡山県）　藤原　辰雄 …… 16

6　認知症当事者による社会参加はいかにして可能か（大阪府）

「ゆっくりの部屋」非常勤スタッフ　澤井　久実 …… 18

7　みんなでチャレンジ！夢と友情をつなげるサーフィンプロジェクト（大阪府）

若年性認知症の人と家族と地域の支え合いの会「希望の灯り」　下薗　　誠 …… 20

パネルディスカッション

＜テーマ＞　「認知症の人も介護する人も人としての尊厳が守られ、夢と希望のある生活」

＜コーディネーター＞　日本福祉大学副学長　原田　正樹

1部　＜パネリスト＞　当事者　宮木きみゑ（NPO だいじこファミリー）

介護家族　野田　啓子（NPO だいじこファミリー代表）

行　政　工藤　暢久（津市健康福祉部地域包括ケア推進室
地域包括ケア推進担当）

専門職　島田　美麻（在宅介護支援センターつまちなか
地域総合センターシルバーケア豊壽園管理者）

2部　＜パネリスト＞　当事者　丹野　智文（「家族の会」宮城県支部会員、おれんじドア宮城代表）

山田真由美（おれんじドアも～やっこなごや代表）

安田日出子（若年性認知症の会「レイの会」・
若年性認知症サロン「鈴鹿家族みまん。」メンバー）

パートナー　鬼頭　史樹（社会福祉士　borderless-with dementia-）

支援者・専門職　西村実希子（社会福祉士　合同会社たまきあい）

実行委員名簿 …… 34

支 部 一 覧 …… 35

個人協賛一覧 …… 36

以下協賛広告

認知症の人と家族への援助をすすめる

第36回 全国研究集会in三重　開催要綱

1　名　称　　認知症の人と家族への援助をすすめる第36回全国研究集会 in 三重

2　日　時　　2020年10月25日（日）　13：00～15：30（全配信時間9：00～15：30）

3　場　所　　（Web開催により実施）三重県総合文化センターほか

4　主　催　　公益社団法人認知症の人と家族の会　（担当　三重県支部）

5　テーマ　　「ともに ～忘れても一人ひとりが主人公～」

6　主　旨　　「最後まで住み慣れた地域で安心して暮らしたい」という願いのものと、認知症の人とその家族は、長年声を上げてきました。「認知症の人も介護する人も人としての尊厳が守られ、夢と希望のある生活」をめざしていくために、地域の中で認知症への理解をさらに深め、ともに生きることが求められています。
認知症になっても本人もまわりの人もいきいきと輝ける地域社会。そして、誰もがお互いの多様性を認め合える社会を創りたいと思います。
認知症の本人とともに（共に、伴に、供に、友に）、その人らしく人生の最期までくらしていくことができる社会の実現を目指し、三重の地で全国の仲間とともに考えます。
人生の主役はあなた自身です。

7　内　容

これらはWeb配信（Zoom、YouTube等）を行う。

■**基調講演**　講演者：遠藤　英俊 氏（シルバー総合研究所理事長、認知症専門医）

■**事例発表**　全国公募による発表（介護家族（県内・県外）、専門職他）

①介護保険や行政施策の挟間になっている問題にインフォーマルサービス（介護保険以外の支援や地域の繋がりなど）を活用した事例

②地域の中で当事者が社会活動（社会参加）を通して生きがいが得られている事例

③認知症の人への理解不足や偏見等を地域の中で解消した事例

④その他、認知症や地域に関わる事例

■**パネルディスカッション**

出演者：県内外認知症当事者の方、県内外認知症介護家族の方ほか

コーディネーター：原田　正樹 氏（日本福祉大学　副学長）

8　参加費　　無料

9　申し込み方法　　Web申し込み

10　後　援

厚生労働省、三重県、津市、全国社会福祉協議会、日本医師会、日本看護協会、SOMPO福祉財団、全国老人保健施設協会、中央共同募金会、全国介護事業者協議会、宅老所・グループホーム全国ネットワーク、日本認知症グループホーム協会、全国老人福祉施設協議会、認知症ケア学会、三重県男女共同参画センター「フレンテみえ」（予定）

＜問い合わせ先＞

公益社団法人　認知症の人と家族の会（担当:上坂・小野）

〒602-8222　京都府京都市上京区晴明町811-3岡部ビル2F　TEL：050-5358-6580

FAX：075-205-5104　Email:office@alzheimer.or.jp　http://www.alzheimer.or.jp/

三重県支部（担当：中川）

〒514-0821　三重県津市垂水2772-75　TEL：059-227-8787　FAX：059-227-8787

認知症の人と家族への援助をすすめる

第36回全国研究集会 in三重　プログラム

9：00

【録画配信】 基調講演

「認知症の人とともに」

講演者：シルバー総合研究所理事長　認知症専門医　遠藤　英俊 氏

【録画配信】 事例発表

1. 渋谷　美和 氏（大阪府）
2. 佐野　佑樹 氏（三重県）
3. 裕　　秀代 氏（奈良県）
4. 中道　和久 氏（三重県）
5. 藤原　辰雄 氏（岡山県）
6. 澤井　久実 氏（大阪府）
7. 下薗　　誠 氏（大阪府）

12：00　「家族の会」三重県支部活動紹介映像、俳句紹介など

13：00　開会式

歓迎あいさつ　公益社団法人認知症の人と家族の会　三重県支部代表　中川絵里子

主催者あいさつ　公益社団法人認知症の人と家族の会　代表理事　鈴木　森夫

来賓あいさつ　厚生労働省 老健局 認知症施策・地域介護推進課 認知症総合戦略企画官　菱谷　文彦 氏

三重県知事　鈴木　英敬 氏

津　市　長　前葉　泰幸 氏

【ライブ配信】

13：25　パネルディスカッション

1部：13：25～14：20

テーマ：「認知症になっても、地域で一人で暮らしていける？？」

コーディネーター：日本福祉大学副学長　原田　正樹 氏

登壇者：宮木きみゑ 氏、野田　啓子 氏、工藤　暢久 氏、島田　美麻 氏

2部：14：30～15：25

テーマ：「認知症になっても、地域で仕事や役割をもって生活できる？？」

コーディネーター：日本福祉大学副学長　原田　正樹 氏

登壇者：丹野　智文 氏、山田真由美 氏、安田日出子 氏、鬼頭　史樹 氏、西村実希子 氏

15：25　次期全国研究集会開催地紹介（山口県）

閉会のあいさつ　公益社団法人　認知症の人と家族の会　副代表理事　杉山　孝博

15：30　閉　会

ごあいさつ



公益社団法人　認知症の人と家族の会
代表理事　鈴木　森夫

認知症の人と家族の会（以下「家族の会」）は、「認知症の人と家族への援助をすすめる全国研究集会」（以下「全国研究集会」）を、1985年に京都で第1回を開催して以来、今年で36回目、東海地区では、2000年の愛知県から20年ぶり、3回目を三重県津市で開催いたします。

今年の全国研究集会は、新型コロナウイルス感染症の拡大で、例年のように全国から参集しての集会が困難となりました。しかし、こんな時だからこそ開催し、インターネットによる配信という新たな手法に挑戦し、より多くの方々に参加の機会を提供したいという「家族の会」三重県支部の熱い思いに後押しされ、結成40周年の節目の年にはじめてのオンライン集会として開催することができましたことは、誠に感慨深いものがあります。本日、全国からご参加いただきました皆さまに心からお礼申し上げます。

開催にあたって、厚生労働省はじめ鈴木英敬知事、前葉泰幸津市長、県内市町村、関係機関、協賛いただいた企業や職能団体、事業所の皆さまにたいへんお世話になりました。ご協力いただき、感謝申し上げます。

三重県は若年性認知症施策総合推進事業を11年前より実施し、10年目の節目の昨年は記念講演会などが開催され、若年性認知症への取り組みを先駆的に進められている県です。

三重県支部は、2002年の総会で支部に承認され、40番目の支部として発足しました。「つどい」「会報」「電話相談」の三本柱の活動を地道に進め、今年で結成18年目を迎えました。現在では、40名を超える世話人の皆さんが協力し、県内10地区“つどい”や若年性認知症のつどいを開催しています。2017年から三重県の委託を受けた「三重県認知症コールセンター」は会員が相談員として従事し、同じ介護仲間として共感と傾聴の姿勢で相談にあたっています。さらに、2019年度からは、認知症当事者による認知症の方への支援事業の「三重県認知症ピアサポート活動支援事業」や「認知症サポーター等活動促進事業」も受託し、行政の積極的な支援と地域の人々とのつながりを支えに、認知症の人と家族がともに安心して暮らせる地域をめざして、活発に活動しています。

全国研究集会は、誰もが認知症の人の対応に悩んでいた時、家族だけでなく、支援する人たちが各地での先駆的実践を交流し、よりよい支援や介護のあり方を共有、広く社会に普及するために始めたものです。今回も、基調講演、事例発表、パネルディスカッションを通して、最

新の認知症情報やさまざまな実践が紹介されます。これらの取り組みなどが全国各地に広がり、行政施策や地域の取り組みとして実現されることを期待します。

全国研究集会では、その時々の社会情勢から、テーマを設けてきましたが、今回は、「“ともに”～忘れても一人ひとりが主人公～」としました。

基調講演は、「認知症の人とともに」と題して、第一線の認知症専門医であり、聖路加国際大学特任教授、シルバー総合研究所理事長の遠藤英俊先生にご講演していただきます。遠藤先生は、テレビの健康番組などおなじみで、多くの著書を出されています。今日は先生の信条のひとつである「私はこれからも認知症の人に寄り添い、ともに生きるために最大限適切な医療を提供します」がベースになった、最新の認知症治療、予防の医学知識とともに認知症の人とともに生きるためのエッセンスを認知症専門医の立場からお話しくださいます。

ライブ配信するパネルディスカッションでは、日本福祉大学の原田正樹先生をコーディネーターに、認知症当事者の宮木きみ子さん、丹野智文さん、山田真由美さん、安田日出子さん、介護家族、パートナーや行政の方、地域の中で仲間とともに自分らしく生きるために必要としていることを語ります。「認知症とともに笑顔で生きるために」を一緒に考えていきましょう。

なお、三重県は俳諧の祖である荒木田守武のふるさと。その縁から全国の支部から俳句を募集し多くの句が届きました。届いた俳句を画仙紙に京都の奥山青里氏が揮毫し、絵は伊勢市の支部世話人の田中邦子氏が描いてくださいました。地元三重県支部の活動紹介動画も配信します。

最後になりましたが、「家族の会」三重県支部の皆さんをはじめ、開催にご尽力いただきました実行委員会の皆さまに心から感謝申し上げ、私のあいさつといたします。

■ 基調講演概要 ■



認知症の人とともに

シルバー総合研究所理事長
遠藤　英俊

私は医師になって、38年間ずっと認知症にかかわってきました。2019年6月に出された認知症施策推進大綱の理念は共生と予防ですが、共生はまさに「認知症とともに」生きるということであり、社会の方向性に合致しています。今回は私自身の経験を通じて私の思うところを展開したいと思います。私の医師としての理念は認知症とともに生き、認知症に寄り添う医療を提供することです。すなわちこのテーマそのものを目指してきました。長く生きれば誰しも認知症になる可能性があります。認知症になっても困らない、大丈夫といえる医療を提供したいのです。アメリカではアルツハイマー型認知症の根本治療薬として期待される薬剤が承認申請を行いました。すなわち認知症も徐々に医療が進歩し、早期であれば治る時代が近づいています。認知症になっても安心できる医療体制と生活支援体制が求められています。認知症の当事者の大きな希望がそこに見出すことができるかもしれません、私は最近では若年性のアルツハイマー型認知症の人に対して積極的に治験を通じて、力を尽くしてきました。とりわけ軽度認知障害の人を早期に発見し、対応を支援してきた中で、有酸素運動や食品による進行遅延を勧めてきました。認知症の人や家族のもつ困難な課題を解決し、本当の意味で認知症の個々の当事者目線で、希望をもち安心して暮らしていただくことを継続的に支援してきました。

特に私は日常診療において重要視していることは、認知症の人の今後の暮らしです。生活費はどうか、在宅を希望しているものの困難になった場合の対応や人生の最終段階の迎え方についてです。延命措置を希望しているのか。自然でよいのか。本人の意思確認とそれを支える体制が大事です。いわゆるACP（人生会議）が認知症の人にとっても大事なテーマです。いかに本人の希望する医療を提供できるか、本人の意思がわからない場合には、誰がどのように対応するのかが重要です。その時にチームで繰り返し相談する体制を日本全国で構築することが必要です。国は認知症の人の意思決定支援と終末期ガイドラインを作成しましたが、認知症の人や家族の声を地域で積極的に聴き、それを反映すべきです。私も66歳を超え、これまでの職場から離れて、今後は地域で認知症の人と家族により密着することで、本人の希望ややりたいことを支援する医療を地域で目指しています。認知症の人に寄り添い、仕事を通じて、「認知症の人とともに生きる」医療を目指したいと思います。そこには一人ひとりの認知症の人と家族に向き合い、パーソナルな希望と尊厳を支援する医療を目指します。しかしながらそれぞれの地域において、「認知症とともに」を目指すにはどうしたらいいのでしょうか、先ずはかかりつけ医をはじめ介護支援専門員（ケアマネジャー）や看護師や介護福祉職がチームを組むことです。一人ひとりの認知症の人にサポートするチームを構成することが求められます。チームは認知

症の人の希望と尊厳を尊重することです。また近い将来にはオンライン診療により全国的にも対応可能な診療を目指しています。こうした医療は新しい試みですが、遠隔地であっても専門医と相談できる仕組みであり、セカンドオピニオンのためにも双方にメリットのある良い仕組みになると思います。

一方認知症ケアにおいてはパーソンセンタードケアが重要であり、これまで私は自分自身が良いケアを受けたいこともあり、長年介護福祉職や介護支援専門員（ケアマネジャー）、看護師の教育に携わってきました。特にイギリスから学んだ「認知症ケアマッピング」の導入には力を注いできました。誰しも日本に生れ、たとえ認知症になっても、良いケアを受け、誰しも幸せな人生を求めたいのは言うまでもありません。さらに研究途上ですが、認知症の人のためのスピリチュアルケアを提案し、普及したいと考えています。そのためにも家族もケアチームのメンバーとして認知症ケアについて学び、適切な対応をするべきです。感情的にならずに知識と経験を得て、介護負担を軽減し、望ましいケアをすることが重要です。そのためにはこの認知症の人と家族の会が重要なのです。創設者のひとりの早川先生は愛知県出身で私の心の恩師の一人ですが、一人でも多くの家族が参加し、知識や悩みを共有することが必要です。家族同士が心をあわせともに歩むことも大事だと思います。この会の長年の貢献に敬意をもっています。ますますの発展を祈念しています。

――― 遠藤　英俊（えんどう ひでとし）氏　プロフィール ―――

高齢者虐待防止学会副理事長
聖路加国際大学特任教授
NPOアクティブ・ウェルエイジング協会名誉最高顧問
日本認知症学会専門医・指導医
1982年　滋賀医科大学卒業
1990年　アメリカ老化研究所留学
1993年　国立療養所中部病院内科医長
2004年　国立長寿医療研究センター部長・長寿医療研修センター長
2020年　シルバー総合研究所理事長

■ 事例発表１ ■



「認知症でつながる・広がる社会関係」

介護者・大学院生（総合研究大学院大学博士課程）
渋谷　美和

【認知症になるまでの母の生活】

私は現在アルツハイマー型認知症をもつ母と二人で暮らしております。母が認知症と診断されたのは、今から約3年前、60歳の時でした。

母は60歳手前で早期退職するまで、ずっと看護師として働いてきました。日勤、夜勤、休みのローテーションで構成される体力的にハードな勤務体系をこなし、何十年にもわたって仕事をしてきました。休みの日は夜勤で疲れた身体を癒すため、とにかく体力回復に努めていた母ですので、私は子どもの頃の母についての記憶といったら、寝てるか、起きていてもテレビを見て体力温存を図る姿しか思い浮かびません。遊んだり、ちゃんと話をした思い出がほとんどありません。その意味でひと昔前の家庭を顧みず仕事に打ち込む男性モーレツ社員と母の姿は幾分ダブっております。母がこんなに仕事一筋だったのは、専業主夫だった父と子ども3人を経済的に支えなければというプレッシャーがあったのだろうと思います。母のおかげで、子どもたち全員が大学に進学することができました。

そんなまじめで一生懸命な母でしたが、50代後半になって物忘れがひどくなり、精神的肉体的にも仕事を続けることが難しいということで早期退職致しました。それまで仕事に生きてきた母は地域とのつながりも薄く、また特に趣味というのもなかったので、退職後は一日中家にいてテレビを見て過ごしておりました。家族としては最初の頃は、まぁ忙しい人生だったから、今はゆっくりしたいんだろうと見守っていましたが、生活に張り合いをなくしてしまったように見える母に、どうしたものかと心配が大きくなっていきました。

【認知症診断がおりた経緯】

そうこうしながら退職してしばらく経ったある日、父が交通事故を起こしました。とても大きな事故で、それ以来現在まで父は入院生活を続けております。母は事故直後にショックのせいか、記憶力が一時的に著しく低下してしまった時がありました。それまでは忘れっぽいなと思う程度の物忘れだったのですが、事故後日常生活に支障をきたす程の「ど忘れ」が何度かあり、心配になってもの忘れクリニックで検査を受けたところ、若年性認知症ということが判明しました。父の事故と母の認知症診断の二つの大きな出来事がほぼ同時に起こったわけです。当時、私はこれからどうすればいいのか、何が起こるのかという、先の見えない不安と恐怖に押

しつぶされそうだったことを覚えております。

【認知症診断後の社会関係の拡大とつながりの刷新】

それからはインターネットですがるような思いで、認知症に関連する公的支援制度やサポート団体を調べました。その過程で、認知症の人と家族の会（「家族の会」）の存在を知り、当時東京に住んでいた兄と私は、母を連れて京都の「家族の会」に参加することにしました。「家族の会」では他の家族介護者の方から励ましの言葉をかけられ、生きることに必然的に伴う苦しみや悲しみをびっくりするような率直さで共有することができました。また、そこで色々な支援制度の実用的アドバイスを受けることができ、母が住む大阪で認知症の人と家族を支援しているNPO法人の代表者をご紹介頂きました。

そこから、そのNPO法人の代表者から今のケアマネジャーさんを紹介して頂き、更にそのケアマネジャーさんが母と、認知症カフェやデイサービスの人たちとをつないでいき・・・このような形で、認知症を軸に母の生活はどんどんと人とのつながりのなかで展開するようになっていきました。一般的に認知症を発症すると認知症の人は社会的に孤立してしまうことが言われておりますが、母に限っては退職直後の半引きこもり生活と比べると、現在のほうが断然社会関係の輪は広がったように思います。また、認知症によって私と母のつながりも変化していきました。認知症を契機に、私は母をより理解できるようになったと感じております。というのは、認知症診断後に母が人と話す機会が増えたことで気づいたのですが、それは母がおしゃべり好きだということでした。看護師として働いていた頃は、私は母とあまり話す機会がなく、母がおしゃべりで社交的というような印象は全くありませんでした。しかし、今、皆さんと楽しそうに話す母の様子を見て、今更ながら母の新しい一面を発見して驚いております。同居を始めてからは、二人で沢山話すようにもなりました。認知症によって私と母との間にも新たなつながりが作られていることを実感しております。

今後も認知症を通してさまざまな人とめぐり会っていくことと思います。認知症を軸にした社会関係のつながりを大切にしながら、母と家族と私は認知症とともに生きていきたいと思います。

■ 事例発表２ ■



デイサービスにおける認知症をもつ人の『だれかの役に立ちたい』を形に
― くじら合唱団 ―

有限会社ホワイト介護　長太の寄合所「くじら」
佐野　佑樹・田中　明美・宮嶋　昌子

【はじめに】

古民家を活用した地域密着型通所介護（以下、Ａデイサービス）では、認知症とともに歩んでいる方が多く通われている。その方たちのＡデイサービス利用開始時の様子は、認知症と診断後、「役割の減少」、「外出の制限」、「仕事の退職」、「知人や地域との付き合いの減少」など、さまざまな作業を制限・剥奪しており、やりがいや生きがいを失い、自宅に閉じこもり傾向となっていた。そこでＡデイサービスでは、心のなかに閉じ込めている「してみたい」という気持ちを引き出し、ともに楽しみながら形にしていくことを理念とした。今回は、興味・関心チェックシートを手段として用い、認知症とともに歩んでいる方を含む利用者（以下、仲間）の「してみたい」、「興味がある」ことを確認し、満たされていない心理的ニーズを探り、満たせるよう環境を整えることを実践した。その結果、「くじら合唱団」という活動を始めることになったため、その活動内容も含め報告する。

【倫理的配慮】

仲間または家族、総施設長に「本報告の目的や内容」、「個人情報に留意すること」、「報告に関しての利益・不利益」、「今後の活動に活かしていくこと」について口頭で伝え、同意を得た。

【経　過】

(1) くじら合唱団結成のきっかけ

仲間16名（2019年6月現在）に興味・関心チェックシートを用いた結果、「ボランティア（69%）」、「歌を歌う（88%）」と、半数以上の人が「してみたい・興味がある」という結果であった。その理由を聞くと、「ボランティア」では、だれかの役に立ちたいという思いがあったこと、また「歌を歌う」ことでは、趣味として歌が好きで、特別な思いをもっている方たちがいた。その内容は、「子供の頃、童謡のみかんの花咲く丘を舞台の上で歌った思い出が今でも

忘れられない」、「音楽一家で、昔から歌を歌うことが好き」などが挙がった。これらの思いを形にするため、Aデイサービスのメンバーで「くじら合唱団」を結成しようとの話になった。その際ある仲間が、「身体が不自由だからできることが少なくなった。だけど、歌を歌うことやミュージックベルを鳴らすことはできるし、楽しいからやりたい」と言ってくれたことで、さらに仲間の士気が上がった。そこで、仲間やスタッフ、地域の協力者、ピアノとミュージックベルの先生（以下、先生）と協働で「くじら合唱団」を結成し活動していくこととなった。

(2) 目標と内容決め

仲間から、「Aデイサービスを卒業され施設入所された方や同世代の人（高齢者）のため、出前公演できないか」との意見が挙がり、その意見にみんなで賛同した。そのため目標は、『歌とミュージックベルの演奏を通して同世代の人（高齢者）を元気にする』とし、出前公演することとした。活動日は毎週水曜日、練習時間は1～2時間とした。選曲は、仲間が人生のなかで思い出深い歌を、回想法を用いて引き出し、その中からみんなで相談し決めた。

(3) 練習方法

先生が歌とミュージックベルの指導を、作業療法士と介護福祉士などのスタッフができる作業を探るほか、どのようにサポートすればできるのかを“必要に応じた適切な援助（見守り・監督・実演・手がかり)”の手法を用いてアセスメントした。歌とミュージックベルの作業をアセスメントした結果、視覚情報（歌う箇所を指で示す・ミュージックベルを鳴らす箇所を◯で示す・2つのミュージックベルを使用する場合はミュージックベルと◯の色を合わせる）や聴覚情報（歌うタイミングを合図で伝える)、触覚情報（仲間の手をサポートしてミュージックベルを鳴らす）があればできる方、また環境の工夫では、仲間同士のピアサポートが生まれるよう席の配置を工夫した。

【結果：出前公演】

練習を開始してから約8ヶ月後に初めて出前公演を行った。場所は、Aデイサービスを卒業された仲間がいるBグループホームである。出前公演時の様子では、その場にいたみんなが笑顔となり大合唱する場面、仲間同士や仲間と参加者との交流、見学された家族が涙する場面がみられた。出前公演後、仲間からは「楽しかった」や「元々Aデイサービスにいた方が涙目になるくらい喜んでくれて嬉しかった」、家族からは「母がみんなと一緒に一生懸命歌っていて、その姿を見て嬉しく思いました」との声が挙がった。また、新たな目標として「家族に見てもらいたい：DVD化」、「文化会館での演奏」、「テレビへの出演」が聞かれた。

【考　察】

「くじら合唱団」を通してさまざまな“役割活動や他者とのつながり、新たな挑戦・夢”が生まれた。これは、①仲間のしてみたいことを活動の軸にした、②さまざまな人が同じ目標をもち協働した、③歌とミュージックベルの作業ができるようアセスメントした、ことが関係しており、日常の延長かつ自然な流れで活動してきたためであると考える。

■ 事例発表３ ■



「ゴーヤ様」

ケアマネジャー・主介護者（妻）
裕　　秀代

これからお話することは、昨年の秋に我が家の庭に起こった出来事です。

季節も肌寒い時期になったのですがなぜか頑張っているゴーヤの実が我が家には、いたのです。

夏の間は、まったく実をつけなかったゴーヤのつるに十五センチ程の実をつけているのです。

「十月末よ。遅い実をつけたこと？」と今年、最初で最後の実を２本収穫しました。

その後も雌花をつけていましたが、もはや大きく育つことはないだろうと感じていました。

先輩のゴーヤに続けと季節はずれの雌花が黄色い花を咲かせていました。小さな花の実のまま枯れていきました。

しかし、雌花の中に葉っぱに隠れて小さな実を育てていたゴーヤ様がいたのです。「どうせ大きくなることはないけど・・あなたの最後を見届けることにするわ。」と心の中で言いました。

頑張ること。頑張ること。細身だけど立派に成長していきました。

私は、最近ゴーヤ様と主人を重ね合わせることがあります。自分の活きやすい時期を勘違いしてしまい本来なら感じることのない寒さに耐えながらゴーヤであることを誇らしげに主張しながら育っているゴーヤ様。

主人は、レビー小体型認知症です。特徴としてパーキンソン症状があり、両手の震えや急に歩けなくなるすくみ足があります。加えて認知症の症状があります。外食時に「虫がいる。小蠅わいている。風呂でヤモリが泳いでいる」「誰か二階にいるぞ。救急車が来ているぞ」等の幻覚や幻聴、物をなくす、日にちや曜日を間違う等の記憶障害があります。進行しないよう訪問リハビリやデイサービスの利用。そして、投薬治療と努力しています。それでも完治することは、ありません。

「今後、どうなるのか？」と不安の中、ゴーヤ様と同様頑張っているのです。

季節を間違わなければ。病気にならなければ。こんな努力も辛さも味わうことがなかっただろうに・・・でもゴーヤ様もご主人様も自分らしさを失うことなく活きています。

毎日、「おかえり」と言う夫の声で救われ、明日の朝の、「行ってくるわ」の私の声に「おお」と応えてくれる夫の声が続く毎日を願っています。

私は、いつの日か来るべき日まで見守り寄り添い勇気づけられ毎日を過ごすことでしょう。

主人の病気のきっかけは、十二年前の弓部大動脈解離の手術でした。手術の際に脳梗塞を発症したのです。目覚めたときには、左半身麻痺になっていました。その後、リハビリにより歩行が出来るようになりましたが、医師から伝えられたのは、幼稚園程度の知能。作業療法士か

らは、「なぜか手から物を離すことができない。たとえば、ボールを投げることができない」と説明されました。

本人からも「ドリルを買ってきて」「病院の近くに飛行場があって毎日、飛行機が飛んでいる」など不思議なことを言うのです。携帯電話でメールを打つことが出来るようになりましたが、ひらがなばかりで脱字もありました。まさに小学校の低学年でした。

その時は、脳梗塞の後遺症と思っていたので度々ドライブにさそい道案内をしてもらいました。徐々に出来ることも増えていきましたが幻覚や時計の文字盤を読み違える。手の震え、すくみ足の症状が顕著に表れてきました。検査の結果、レビー小体型認知症と診断されました。認知症とパーキンソン症状？それは、大変だ。でもね。考えてみれば主人は、主人。今も昔も主人に変わりないのです。

今も車で週1回程度出かけます。カフェにモーニングセットを食べに行きます。

行き付けの店は、三軒ほどありますが初めは、戸惑っていた若い店員さんも最近は、自然とドアを開け、支払いも様子を見て手伝ってくれるようになりました。もちろん、支払いは主人です。いつもご馳走になっています。

最後に私が伝えたいことは、本人も介護者もみんなそれぞれで代わることなくオンリーワンなのです。良い介護者になる。面倒をかけないように生活する。すばらしい心構えだと思いますが、疲れてしまいます。先々を思って構えるのではなく寄り添う気持ちでいいのではないでしょうか。

職業柄認知症と診断された方々や介護されている家族の方々とお話する機会がありますがどうぞ一人で抱え込まないで下さい。医療や介護の制度、地域の協力もあります。どうぞ利用してください。言葉で表現できなくても心の中には、伝えたいことがいっぱいあると思います。近すぎて気づくことが出来なかった声も聞こえてくるかもしれません。

■ 事例発表4 ■



写真で見る認知症介護の歴史の一断面

津市認知症・在宅介護研究会
中道　和久

当研究会は、15年前から、認知症の人と家族の会のメンバーを中心に、家族のつどいを企画し、津市を中心に、認知症についての啓発に取り組み、在宅での介護の実態調査や研究を行ってきました。

今回三重県で全国研究集会が開催されるにあたり認知症の人と家族の会三重県支部の立ち上げから中心的な役割をされてきた中祐一郎氏の記録をもとに、認知症介護の一断面を振り返り、津市での認知症介護の取り組みを報告します。

中祐一郎氏はもともと建築家で、三重大学建築学科教授当時、東京都の老人総合研究所の林玉子さん（故人）たちと、高齢者の生活（住環境など）の調査を始めました。そして、当時社会問題になりかけていた認知症高齢者の生活の実際を調べることから研究を始めました。その記録姿勢は、主観を入れずに、施設の方の考えを汲み取る思いで取材されたとのことです。『ありのままを忠実に』です。

写真は、1985年から、2005年までの関東、東海、九州、北陸地域の、当時普通に見られた介護現場の状況の変化と先進的な取り組みまで。ピンポイントでの記録です。

有吉佐和子氏の「恍惚の人」が大ヒットしたのが1972年。これが、痴呆症（当時）が広く認識されるきっかけとなったことは言うまでもありません。その後15年を経て、羽田澄子監督によるドキュメンタリー「痴呆性老人の世界」が世に出され、認知症高齢者についての認識も変化が見られました。

1972年の「恍惚の人」（認知症になった舅の介護に追われる嫁＝主婦＝家族の奮闘を描く）。

これらの作品は、当時の認識（ボクは『・・長谷川先生によると・・』恍惚の人という言葉が独り歩きし、恍惚の人＝何もわからない人＝怖い人といった間違ったイメージが広がったこと）への弊害も指摘されています。

これ以降の作品も多くは、主に介護する側の視点で認知症が描かれており、本人（当事者）の思いはあまり出てこない。その後しばらく、活字や映像にもこの傾向は続く。転機になったのは2006年映画「明日の記憶」まで待つ必要がありました。

＊スライドは、認知症高齢者施設の状況から始まります。

施設内は清潔に保たれている様子が見て取れます。しかし、「大部屋」（8人部屋）は当時の社会的水準ではありますが、プライバシーの保護の視点から「見学をするのがためらわれるほど」であったとしています。

また、1990年ごろの特別養護老人ホームでは、入浴・排泄は、裸が丸見えであったり、時間で一斉であったり、また、ベッドルームも個別性が顧みられないなど隔世の感があります。

しかし、他の施設では入居者の表情は穏やかで、それぞれが、いろんな行動をしておられるのに安心感が得られていることが見て取れます。また、この時期、多床室（4床）の各部屋にトイレがあるのは先進的です。日常の生活の様子、体操や食事などの和らいだ風景が見られるようになって来ました。こうしたなかでも先進的な介護が試みられ、様々なところで経験が蓄積されてきました。いかに多くの人たちが、悩みながら、一人一人の暮らしや生活、その人らしさに向き合ってきたか、その成果がいま改めて私たちの財産になっていると思います。

津市（三重県の県庁所在地で、合併により人口は30万弱）では、認知症の人と家族介護者の「つどい」が7か所で行われています。内訳は、「家族の会」1、病院関係2（国立1　県立1）、地域包括支援センター3、NPO1です。

曜日や時間もまちまちなので、相性や都合でいろいろ選んで参加できるようになっています。また認知症対応のグループホームは30事業所。そのうち、我々の聞き取り調査では、「日中は無施錠」が8事業所です。

最後になりますが、 介護の歴史を振り返るとき、「この子らを世の光に」と言い切った近江学園の糸賀一雄先生が残されたこの言葉を、いま改めて噛みしめたいと思います。糸賀さんが提唱された姿勢、認知症高齢者の日常生活が普通の生活になるとき、高齢者だけでなく、障がいがあっても本当に世の中の主人公として生きていく。そんな生活が送れるのではないかとの思いを一層強くしたものです。

ともに　**～忘れても一人ひとりが主人公～**

そうです　**…この人たちを世の光に…**

■ 事例発表5 ■



私の介護体験

岡山県
藤原　辰雄

私の妻は、平成16年9月の初め自宅で転倒し、左大腿骨頚部骨折で市内の総合病院に入院しました。入院直後から、それまで穏やかであった妻の表情から笑顔が消え、うつのような状態になり、一緒に暮らしている私のことはわかりましたが、娘や兄弟たちが見舞いに行っても誰かわからない状態でした。そして間もなく認知症の告知を受けました。その後うつ状態が改善しないまま、急性期の治療が終わった10月中旬、リハビリのできる病院に転院しました。

当時私は仕事を持っていましたが、朝と夕方の食事介助と夕食後の歩行訓練、上下肢のマッサージ、頭を軽くたたく脳の刺激療法を、それぞれ30分毎日実施してきました。また知人の薬剤師の勧めで、認知症に良いと言われる漢方薬「脳活性」を高額でしたが服用させました。

お蔭でまだほとんどの部分で介助が必要でしたが、うつ症状は解消し、会話や食事摂取も出来るようになり、転院して6か月後の平成17年4月初めに退院できました。妻の入院中は、退院して家に帰るのは無理かもしれないと思う時もありましたので、この退院は、私にとって大きな喜びでした。なお退院した時の介護度は4で、この4はその後8年続きました。

妻の退院後は、私が妻の介護をする予定でしたが、事情があって退職できなくなり、やむを得ず、当時公務員として勤めていた娘に無理を言って、1年間介護休暇をとってもらい、平日中の介護を担ってもらいました。また訪問介護・通所リハビリ等も利用しました。そして私は勤務の傍ら、今後妻の介護ができる場をつくろうと考え、民生委員や知人の協力を得て、平成19年8月にNPO法人を立ち上げ、認知症対応型通所介護施設を開設しました。

妻は、約9年間この通所介護施設を利用しました。ここでは私は管理者の立場でしたが、忙しい時は他の介護職員と同じように、妻と男性利用者のトイレ介助・入浴介助をしてきました。

この通所介護施設を利用し始めて1年ほど経過したころから、夜になると家に帰る、家に帰ると言うことが増え、実家近くまで車を走らせたことが度々ありました。同時に深夜の徘徊も始まりました。徘徊防止のため玄関の鍵を2重にしていたのですが、2つとも解錠して外に出るのには感心しました。徘徊はほとんどの場合短時間で発見できましたが、時には時間がかかり警察に協力をお願いしたこともあります。

また、内科的疾患と転倒で4回短期入院しました。入退院を繰り返す度に、だんだん体力が落ちていき、認知症も進み、それまでできていたことができなくなり、介護の負担が増えてきました。さらに、平成22年5月の圧迫骨折により2か月の入院で、それまで施設の中だけで使っていた車椅子が、家の中でも必要になるなど、すべての面で介護が必要になり、家も全面的にリフォームしました。そのうえ、それまで全部揃っていた妻の歯が、2か月程の間にほとんど

が、抜けたり折れたりしたためか、介助しても食事を受付けなくなり、誤嚥性肺炎を繰り返したため、入院して口や喉の検査を受け、その結果平成24年10月に胃ろうを造設しました。この胃ろうの造設により栄養剤の注入等、介護負担が増加したため、平成25年4月に要介護5になりました。

その後、身体機能のさらなる低下を防ぐため、週に1回、訪問によるリハビリを受けることにしました。要介護5になると妻が自力でできる部分は皆無で、すべての面で介助が必要でした。

その中でもトイレ介助が大変でした。排泄はトイレまで誘導していましたが、私自身の健康のために、午前零時から6時までは睡眠時間に当てていました。ところがこの時間帯に失敗する頻度が高く、大きめのパットを使用していましたが、軟便の時が多く、下着やパジャマを汚すことが度々ありました。

その後私は、平成26年3月に大腸癌と糖尿病のため仕事を辞め妻の介護に専念しました。そうした中、平成28年4月、体力的に車椅子への移乗やトイレ誘導が出来なくなり、妻の通院にも介護タクシーを利用するなど、体力の限界を感じてきましたので、ショートステイの利用を始めた特養に、入所相談に行き、5月初めに入所できました。

16年間を振り返ってみますと、最初の入院から5か月間は、先行きの見通しが全くたたない、暗いトンネルの中にいる感じでした。しかし入院6か月目から、退院が視野にはいり、希望のもてる日々に変わりました。在宅期間の前半は、徘徊等はありましたが、まだ知力と気持ちに少しゆとりがあり、比較的落ち着いた状態で介護ができました。在宅期間の後半はトイレ介助等どれをとっても大変で、毎日が厳しい闘いでした。

そして現在は介護や仕事から離れ、心豊かな時間がもて、妻も満足度の高い介護を受けており、感謝の気持ちで一杯です。

最後に、私が勤めをしながら、妻の介護が出来るよう応援してくれた方々や、地域で支えていただいた方々に心から御礼申し上げます。

■ 事例発表6 ■



認知症当事者による社会参加はいかにして可能か

「ゆっくりの部屋」非常勤スタッフ
澤井　久実

1. はじめに

大阪市認知症の人の社会活動促進センター、通称「ゆっくりの部屋」の活動について発表する。これは、大阪市から認知症の人と家族の会（「家族の会」）大阪府支部に業務委託されたものである。大まかな業務内容は、認知症初期の方にピアサポーターとして勤務してもらい、「ゆっくりの部屋」という拠点内・外で当事者が主体性を持って活動を行うこと、また当事者が社会参加するための支援方法を模索することである。

2019年8月より開所し、2020年2月時点で4名のピアサポーターが勤務している。

2. 認知症当事者に焦点を当てるために

「ゆっくりの部屋」はデイケアセンター等とは異なり、決まったプログラムを用意していない。ピアサポーターがデイケアセンターや家庭内ではできないこと、やりたいと言えないでいることを発言してもらうことを要求する。スタッフとピアサポーター（同伴の家族を含む）が共に時間を過ごす中で、彼らは居場所に慣れ自己を発揮していくようになった。それは家族にとっても新鮮な変化であり、ピアサポーターという職を得て、役割を持つことで家庭とは違う顔を見せるようになったという。

3. ピアサポーターX

本稿の中心的な調査対象者である水曜日勤務のピアサポーターXについて、説明する。

Xは、調査開始時点81歳の男性で2017年11月にアルツハイマー型認知症初期と診断を受けた。認知症の疑いを持ったときのことを聞くと、X自身の語りでは、「怒りっぽくなった」「人に言われたら腹立つ」という自覚症状があった。

近くに住む二女らと「ゆっくりの部屋」プレオープンイベントに来所した。その時行ったピアサポーターの勧誘と二女の勧めにより、数回の来所見学を経て勤務することが決まった。

4. Xが「ゆっくりの部屋」で働くことについて

●事例：初めての買い出し

職員A：「今日の仕事はどうでしたか」

Ｘ：「領収書、あれは勉強になったわ、賢くなった」
「レジに言ったらもらえるんや」（Field note 2019. 10. 9）

新しいことを知る・学ぶ喜びが表現された。それ以降、買い出しを頼んだあとには、「○○が売ってた」「○○も売ってるんやな」と新鮮な驚きを見せる。小さなことでも新しい発見があることはＸにとって喜びであり、仕事に対して満足感を与えるものだった。そして、職員らにとっては、物の名前を覚えられない、長く記憶していられないという偏見があったため、その偏見を塗り替えられる出来事でもあった。

買い出しに同行した職員Ｂから、ミーティングで以下のような相談があった。

職員Ｂ：一緒に買い物に行き、「封筒選びでシンプルな白のやつか、ちょっと豪華なやつがあって、Ｘさんのチョイスにしたけど、自分的には豪華なやつにしようかなと」
「その場はＸさんの言う通りにしたけど」
これに対し、
代　表：「Ｘさんに頼んだから彼のチョイスを尊重する」
職員Ｂ：「レジで順番を待ってるとき、抜かそうとしたから止めた」
代　表：「そういういけないことをしようとしてるときは止めたらいいけど、そうでないことは彼の選択を尊重する」（Field note 2019. 10. 9）

福祉施設や介護の現場での職歴がない職員Ｂにとっては、Ｘにどこまで任せられるのか不安であった。しかし、Ｘを同僚として捉えなおしてみると、Ｘが職員Ｂと違う封筒を選んだとしても、Ｘはそういうセンスなのかという捉え方になっただろう。職員側の見る目、態度が変わるだけで、Ｘはのびのびと働けるのではないだろうか。筆者を含め、職員が当初できないと思っていたＸのひとりでの通勤、時事ニュースの暗記、職員・「家族の会」世話人の名前の長期記憶、冗談を言うことができること、全てがＸの評価をあげることだった。また、Ｘがピアスタッフとして勤務し、同じ給料で働く以上、Ｘが負うべき自分のことは自分でするという責任付与が確認できた。

5. おわりに

本研究では、認知症当事者の能力を引き出し、社会参加することはいかにして可能かということに注目してきた。眠っている当事者の能力を引き出すには、まずはやってもらうことが必要である。職員側の認知症の人はきっとこうだ（できる/できない）という偏見を取っ払い、同じ立場で働く同僚という感覚を持つことも重要である。ピアスタッフには時間をかけてこの居場所に慣れてもらい、段々とやりたいことを発揮してもらうことが、本人のやる気を引き出すことと家族を元気づけることにつながっていた。いつもは眠っている・隠されているとされる認知症当事者の能力ややる気を引き出すためには、場の寛容性と認知症当事者を認知症という診断名を除きひとりの人として見る見方が求められる。互いの理解のズレを埋めていくような相互行為が、認知症当事者の社会参加には大切である。

■ 事例発表7 ■



みんなでチャレンジ！
夢と友情をつなげるサーフィンプロジェクト

若年性認知症の人と家族と地域の支え合いの会「希望の灯り」
大阪府　下薗　誠

はじめに

若年性認知症の人と家族と地域の支え合いの会「希望の灯り」（以下、希望の灯り）は、2009年10月より地域のみなさんと共に認知症に関する意識調査研究、分析、実践を重ねていたなかで、2012年10月に発足しました。この希望の灯りの誕生は、認知症の本人・家族が集まり作られたものではなく、認知症に関する意識調査にかかわった地域の方々から若年性認知症への地域の取り組みが必要であるとして生まれたものです。地域から認知症への理解をアピールすることで誤解や偏見なども少なくなっていき、認知症になっても住み慣れた場所で普通に暮らすことを地域全体で作ろうという思いがあります。

希望の灯りの目的

①若年性認知症の本人や家族が住み慣れた地域で、人々の温かいまなざしと支援の中で暮らし続けることをめざす。
②若年性認知症の理解を広める啓発活動や地域との交流を深め、地域貢献の機会を実現していく。
③本人、家族の居場所の構築と社会貢献の機会や就労の機会を作り出していくこと。
を目的としています。

夢と友情をつなげるサーフィンプロジェクト

今回、一人の認知症のある人（以下、本人）の一言から始まった夢を、多くの仲間たちと実現し楽しんだ出来事を紹介します。

2017年9月三重県で認知症に関するフォーラムが開催され、希望の灯りのメンバーと参加しました。その帰り、三重の本人や家族、医療福祉専門職の方々と夕食を共にすることになりました。昔の仕事のことや現在の暮らし、病気のことなど、いろんな話が出てきました。その中で、本人の昔の趣味の話になり、「もう一度サーフィンしたいなぁ」と遠くを見つめつぶやいたのです。その様子を見て「来年サーフィンしましょうよ」と声をかけました。単純になんとかしたいと強く思ったからです。たくさんの本人・家族の話を聴く中で、本人は家族に迷惑をかけていると思い気を使い自分の気持ちをなかなか口にしない、家族もまた本人にいろんな気を使い、互いがやりたいことを遠慮しているという話は、たくさん聞こえていました。

“認知症になったから夢を捨てなければならないなんて、おかしいことだ。家族でできなくても仲間がいればかなうことはたくさんある。楽しみたいという気持ちは誰もが持つ当たり前の



2019年8月



国府の浜にて　仲間がいれば夢はかなう

ことだ。家族だっておんなじだ”

そしてその時から実現に向けて走り始めました。サーフィンのことなど全く知らなかった私でしたが、仲間であった認知症の人と家族の会三重県支部の方（以下、三重支部）と一緒に走り始めました。実現するにはどこで開催したらいいか、どこに協力依頼したらいいかなど、課題は山積みでした。希望の灯りメンバーはサーフィン経験者もおり、みんな旅行気分で楽しむ機運満載。ほどなく場所は本人がよく行った海岸、国府の浜に決まり、おのずと相談する方々もわかってきました。三重支部は地域包括支援センターなどの知り合いの方々へ趣旨を話し賛同を得ていかれました。希望の灯りはサーフィンの経験者に趣旨や思いを伝えました。最初に賛同してくれたのが認知症フレンドリージャパンイニシアチブ（以下、DFJI）の神奈川県の方、そしてそこから関西の方を紹介していただきました。また職場の関係者にも声をかけ賛同を得ていきました。三重支部は、三重県志摩市役所や地域包括支援センター、国立三重大学へと協力依頼を、そこから志摩市民病院、市議の方々とつながっていきました。そして最大の協力者が見つかりました。それが日本サーフィン連盟三重支部でした。サーフィン連盟の全面バックアップを得て、多くのサーフボード、コーチングスタッフもそろいました。こうしてたくさんの人の思いがひとつになり、第1回サーフィンプロジェクトは2018年8月開催されました。

神奈川県でもサーフィンを楽しむ本人を支えている団体があると新聞記事を読んだことがあったのですが、なんとその団体から連絡をいただき翌年、一緒にサーフィンをしたいというメッセージを受け取りました。そして2019年8月に第2回の夢と友情をつなぐサーフィンプロジェクトが開催されたのです。もちろんバックアップ体制は前年より万全となっていました。参加者は宮城県、東京都、神奈川県、愛知県、三重県、京都府、福井県、大阪府、兵庫県、岡山県、広島県、台湾など。報道機関も来られ200人強の参加者や協力者で開催できました。

当日は、夢をあきらめず、楽しみを分かち合う多くの光景が広がりました。そこには認知症であろとなかろうと関係のない、素直に楽しむ人たちの笑顔が太陽の光のようにあふれんばかりにふりそそいでいました。サーファーの方々が言う「水面50cmの奇跡」を誰もが体験した日でした。

2020年、今までの経緯から志摩市にサーフ連絡協議会が発足しました。大切な思いを夏のひと時とせず、志摩市全体で支え合う地域共生の新たな一歩を踏み出しています。

このことが共に歩いてきた証であり、これからも夢と友情をつなげるものとなりました。



親睦会　各地から集まったみなさんと

パネルディスカッション趣旨

「認知症の人も介護する人も人としての尊厳が守られ、夢と希望のある生活」を目指していくためには“認知症の理解を深め、ともに生きる社会の実現”が求められています。このパネルディスカッションでは2部構成とし、パネリストから本音を語ってもらいます。そして初期や進行期の認知症の人や家族の地域生活の課題を知ることで、それぞれの立場からできること、ともに生きていくためには今何が私たちに求められているのかを考えます。また、このパネルディスカッションが、ともに生きていく社会の実現に向けての一助になればと考えています。

1部：13：25〜14：20

テーマ：認知症になっても、地域でほんとうに一人で暮らしていける??

（認知症の初期、どんな困りごと、不安があり、そのために家族や住民が出来ることって何だろう!!）

コーデネーター：原田　正樹　日本福祉大学　副学長

パネリスト：

・当 事 者　　宮木きみゑ（津市在住86歳）
・介護家族　　野田　啓子（宮木きみゑさん家族）
・支 援 者　　工藤　暢久（津市健康福祉部地域包括ケア推進室地域包括ケア推進担当）
　　島田　美麻（在宅介護支援センターつまちなか
　　地域総合センターシルバーケア豊壽園管理者）

2部：14：30〜15：25

テーマ：認知症になっても、地域で仕事や役割をもって生活できる??

（認知症が進行し支援が必要となった時、ともに地域で夢をもち生きがいのある暮らしを
継続していくために一人ひとりに求められる社会（地域）とは!）

コーデネーター：原田　正樹

パネリスト：

・当 事 者　　丹野　智文（宮城県在住）※Zoom参加
　　山田真由美（愛知県在住）
　　安田日出子（三重県在住）
・支 援 者　　鬼頭　史樹（社会福祉士　borderless-with dementia-）
　　西村実希子（社会福祉士　合同会社たまきあい）

（敬称略）

■ コーディネーター紹介

原田　正樹（はらだ　まさき）

プロフィール

日本福祉大学　副学長

日本地域福祉学会会長、日本福祉教育・ボランティア学習学会会長。

「広がれボランティアの輪」全国連絡会副会長、生活困窮者支援全国ネットワーク理事。

各自治体の地域福祉計画の策定などに関わる。

『地域福祉の基盤づくり』中央法規、『地域福祉援助をつかむ』有斐閣など

メッセージ

地域福祉、福祉教育について勉強しています。地域でどうしたら共に生きていくことができるのか。これまでの社会福祉は分野ごとに支援の枠組みをつくってきました。それによってサービスが充実した効果もありますが、一方で「縦割りの制度」では、制度の狭間（はざま）や専門職のたらい回しをつくってしまいました。

地域共生社会では、そうした仕組みを変えていくことを考えています。まさに0歳から100歳の地域包括ケアです。行政、専門職、企業、地域住民が協働していける仕組みが必要です。ただし仕組みだけでは、十分ではありません。私たち一人ひとりが共に生きるという意識を形成することが不可欠です。でもそれは簡単なことではありません。認知症のこと、障害のこと、貧困のこと、子育てのこと、外国人たちの暮らし、それは別々の問題なのではなく、きっと根っこではつながっているのかもしれません。そのひとつのキーワードが「地域」だと思います。

きっと認知症の人や家族にやさしい地域は、誰にとってもやさしいまちであるはずです。そんなまちをめざしている、みなさんのお話から学びたいと思います。

■ 1部 パネリスト紹介

当事者

宮木　きみゑ（みやき　きみえ）

プロフィール

昭和9年4月27日生まれ（86歳6ヶ月）

専業農家の主婦（39歳から兼業農家）

子供は1男1女。白米・餡子大好きな糖尿病患者。75歳頃から心臓ペースメーカーのお世話になる。好きなことは散歩。電車・バスでのお出掛け。中学生の頃の悔しい思いが忘れられず走ること。（元短距離選手・三重県2位）苦手なことは字を書くこと。人前で歌うこと。自慢できることは足腰が強いこと。86歳になっても歯は全部自分の歯であること。座右の銘は「悩みが有るのは生きてる証拠。悩みが無くなったらおしまい！」

2014年（平成26年）4月30日、80歳の誕生日を迎えた三日後にアルツハイマー型認知症と診断される。2015年3月から三重大学病院の音楽療法教室に週1回通うが、今年3月には音楽療法士の方の大学院進学、またコロナ禍もあり突然の終了。2016年から認知症当事者と家族・支援者が伴に走るRUN伴マラソンにランナーとして参加。毎回数百メートルを走る。2017年3月から週3回デイサービスに通う。（今年4月からは週4回）デイサービス以外の日は娘と出掛けるのが楽しみ。時々娘の活動の手伝いや会議にも付き添う。2018年、2019年は三重県文化会館主催の「介護を楽しむ、明るく老いるアートプロジェクト」に娘と一緒に参加。84歳にして初舞台を踏む。今年92歳になる夫がいるが、目や足腰が悪いのでデイサービス以外の日は一日を殆どベッドの上でラジオを聴きながら過ごしている。数年前からは夫の世話は息子夫婦に全て任せている。

それまで充分世話をしてきたので、病気を機にお役御免とさせてもらった。

「認知症になっても地域で一人で暮らしていけるか？」についての思いや関わり方について

ときどき悩んでいることはないか？困ったことはないか？と聞かれますがありません。またやりたいことは何か？と聞かれますがこれといってありません。好きなことは電車やバスに乗ってのんびりと出掛けることです。電車に乗るとどこまででも乗って行きたくなります。周りの景色を見ながら散歩をするのが好きです。これといって買うあてはないけど買い物に出掛けることが好きです。みんなと一緒に居る時が楽しいです。みんなと「だいじこ子守歌」を歌うのが楽しいです。

走ることが好きです。練習をしなくてもいつもかけっこは一番でした。

今年は市長さんと走れないので残念です。字が下手なのでもう少し上手になりたいです。

親孝行ができなかったのが悔やまれます。

私は元気です。今が一番幸せです。

代筆　野田啓子（当事者の子）

介護家族

野田　啓子（のだ　けいこ）

プロフィール

家族・当事者の子

大学卒業後、一般企業に就職。2002年乳癌全摘手術を体験。その後、離職・転職をし2010年に町づくり活動に主眼を置く市民団体「NPO法人三重ドリームクラブ」と出会い参加。この頃から活動ネームとして「TSUぶ☆あん子」と名乗り始め、お祭り・イベントに参加。また会の活動とリンクする津市中心市街地活性化タスクフォースにも参加。大型店には無い商店街の良さをアピールし、再び商店街にたくさんの人に足を運んでもらうためにはどうするか、時に大学生も交えて自主イベントを開催し復活の方策を探る。

2014年春、母が80歳の時にアルツハイマー型認知症と診断される。この時を境に活動方針

を転換。認知症になっても安心して暮らせる町づくり。また、言いたいけど言えない心の声を手紙に書いて気持ちの整理のお手伝い、そんな伝えられない想いを受け取る手紙やさんを会の2本柱に据え活動をする。そして会の名前を「だいじこファミリー」とし、非営利市民活動団体として始動する。2016年にキャラバンメイトとなり、2017年から認知症サポーター養成講座を開催する。2年前からは偶数月に1回の割合で定期的に開催している。

今年に入って地元の高校生の皆さんにも講座を受けて頂く機会を得、若い人達の関心の高まりを嬉しく感じている。

要介護2の母は要介護3の92歳の父、兄夫婦と暮らしており、私は週4日のデイサービス以外の日の見守りを担当。時間と母の体調が許す限り、通院以外は母が好きな散歩、電車・バスに揺られてのプチお出掛けを楽しんでいる。

「認知症になっても、地域で一人で暮らしていけるか」についての思いや関わり方について

私や母が望むことは認知症になっても今まで通り普通に暮らすことです。また、ためらうことなく認知症だということを周りの誰にでも話せることです。住み慣れた町で、なるべく環境を変えることなく、今までの人間関係が続けられ、生活環境・生活習慣を認知症の人のリズムやペースに寄り添える町で安心して皆さんと共に暮らすことです。その実現に向けて私たちは母が認知症と診断された2014年から町歩きをスタートしました。まずは認知症を患ったきみちゃん（母）のありのままの姿を見てもらおうと思いました。テレビや新聞、座学では伝わりにくいところを気軽に接してもらい、感じてもらいたかったのです。きみちゃんも認知症の症状以外は普通のおばあちゃんということを知ってもらいたかったのです。

認知症と診断されて間もなくから周囲の人には母が認知症であることをカミングアウトしました。そして手助けしてほしい時には手を貸して下さいとお願いもしました。また、不安そうな母を見かけたら連絡下さいともお願いしました。その効果もあって少しづつ母のことを気に掛け、見守って下さる方が現れました。母を見かけたと連絡して下さる方も現れました。不安そうにしていなくてもです。

そして二人で始めた町歩きを発展させた「町歩きde認知症サポーター養成講座」を開催することにしました。日頃お世話になっている商店街を舞台に、健康に良いウオーキング、そして演者も参加者も楽しめるオリジナル寸劇による認知症のあるある話。要所は座学で学ぶという一度の講座で三つのことが体験できる欲張りな講座です。習うより慣れよということわざがありますが、私達はまず知ってもらいたいと思います。そして少しの時間でも良いので一緒に過ごしたいです。特別じゃない、普通の隣人として皆さんと共に平平凡凡に暮らしていきたいと思っています。

行　政

工藤　暢久（くどう　のぶひさ）

プロフィール

津市健康福祉部地域包括ケア推進室　地域包括ケア推進担当副主幹

平成14年津市（旧久居市）入職。

障がい福祉施策、市営住宅施策などの従事を経て、平成29年度より現担当にて認知症施策に従事。津市認知症初期集中支援チーム員（社会福祉士）、津市認知症地域支援推進員。

伝えたいこと

認知症に関わる専門職として、「その人はどういったことを望んでいるのか」を意識し、オーダーメイドの支援を常に心掛けています。認知症の早期診断・早期治療は、認知症になっても地域で暮らし続けるためには必要なことです。できるだけ早く、そしてご本人やご家族の意向を尊重しながら、医療・介護等のサービスにつながるよう日々取り組んでいます。身近な方に「もしかして認知症？」「認知症の症状で困っている」といったことがあれば地域の認知症初期集中支援チームや地域包括支援センターに遠慮なくご相談ください。

しかし、さまざまな認知症の方に携わる中で、医療・介護のサービスだけでは、ご本人やご家族に寄り添った支援に限界があることも感じています。「医療・介護」も大切ですが、ご本人は、「やりがい」「居場所」「仕事」「仲間」といったことを求めている場合が少なくありません。

そんな中で、認知症カフェでの「本人ミーティング」の取組に参加させていただき、認知症の人同士が出会い、支え合うことのすばらしさに触れ、専門職では解決できないニーズへの可能性を感じました。

認知症の人が地域で暮らしていくためには、家族はもちろん、同じ立場にある仲間の存在、また地域でともに暮らす地域住民の力が不可欠です。本市では「認知症にやさしいまちづくり」に向けて、小中学校でのキッズサポーター養成講座や、認知症高齢者に身近な地域の商店街等と連携した認知症サポーター養成講座等の取組が、住民主体にて始まりつつあります。

こういった活動を認知症地域支援推進員を中心とした専門職が支えつつ、認知症施策推進大綱の二つの柱である、地域住民・認知症サポーター等を中心とした「共生」、医療・介護を中心とした「予防」の各種施策に、認知症の人やその家族のご意見を反映することができるよう、取り組んでいきたいと考えています。

専門職

島田　美麻（しまだ　みま）

プロフィール

在宅介護支援センターつまちなか地域総合相談センターシルバーケア豊壽園センター長
社会福祉法人洗心福祉会　つまちなか居宅介護支援センターシルバーケア豊壽園施設長

平成10年に洗心福祉会に入職、特別養護老人ホームシルバーケア豊壽園介護員、在宅介護支援センターシルバーケア豊壽園相談員、居宅介護支援センターシルバーケア豊壽園介護支援専門員、津中部南地域包括支援センターセンター長（社会福祉士）を経て現職に至る

「認知症になっても、地域で一人で暮らしていけるか」について

ケアマネジャーとして、認知症と診断を受けた人とそのご家族に初めてお会いしたときに「ご本人やご家族にしかできないことが沢山あります。でも、ご本人やご家族以外にもできることがあります。だから、私たちにできることは私たちに任せてください。ご本人やご家族の大変さを少しでも減らすことができるように、一緒に考えさせてください。」とお伝えします。これまでとは違う変化に戸惑い、ストレスを感じ、終わりの見えない毎日を嘆く方もいらっしゃいます。私たち専門職であっても対応に悩むことが多々あります。ご家族ならなおさらだと思います。だからこそ、介護保険制度や関わる医療・介護・福祉の専門職を上手に活用して、少しでも快適に、少しでも穏やかに過ごしていただきたいのです。

一人暮らしの高齢の方が増えていますが、認知症と診断されても一人で暮らしていくために必要なものは、ご本人が家で生活したいという思い、ご家族の理解、行政・医療・介護・福祉の連携はもちろんのことですが、地域で暮らしていくために欠かせないのが生活圏の人々の理解と協力です。地域住民や職業人、すべての人に認知症についての正しい知識をもって欲しい。そんな願いから、認知症サポーター養成講座の講師をさせていただいています。これまで学童保育、高等学校、老人会、民生委員、配達員、スーパーの店員、施設の職員の方々を対象として認知症サポーター養成講座を開催させていただきました。最近は2か月に1回「だいじこファミリー」の皆さんと一緒に講座をさせていただいています。数人規模から50人規模まで、小学生から80歳台まで年齢も様々ですが、伝えたい思いは変わりません。認知症であっても地域の一員として普通の暮らしができることを目指し、認知症を正しく理解してもらえるように、正しい知識を伝えていきたい。そして、今後、認知症になったとしても一人で暮らしていける地域になるように、これからも活動を続けていきたいと思います。

「認知症になっても」から「認知症になった私だから」出来る事へ

当事者
丹野　智文（たんの　ともふみ）

「家族の会」宮城県支部会員、おれんじドア宮城代表

私は、不安でいっぱいだった時に、私よりも先に「つらい時期」「不安」を乗り越えた当事者との出会いがありました。笑顔で元気に前向きに生きる認知症当事者と出会ったことがきっかけで前を向いて生きていくことができるようになりました。

そして、不安をもっている当事者が笑顔になってもらえるように6年前に認知症当事者が不安をもった当事者の話を聞く相談窓口おれんじドアを作りました。おれんじドアは、支援者が作ったものに私が入ったのではなく、私と認知症の人に関わる人達と共に作り上げてきたので、「当事者が中心の相談窓口」が実現できたのです。

おれんじドアを始めて5年くらいたった頃。支援者から「ここに出て来られる人は良いよね」と言われ、まだまだ家に引きこもって出てこられない人がいるということに気づきました。そして、そのような人達と早めにつながることができないかと考えました。「家に引きこもっていても病院には行くはずだから、病院の診察室で出会う事が出来ないか」と考えて、病院の診察後に、近くの部屋で元気な当事者と不安を持った当事者が出会えるピアサポートの仕組みを作りました。

私は、自分自身のアルツハイマー病を理解し、認知症という状態を受け入れ、認知症とともに生きるという選択をしたことで、会社の理解を得ることができました。

ネッツトヨタ仙台では、私が働き続けることができているので、他の社員はもしも、自分が病気になったとしても働きたいという意思があれば働き続けることが出来るという安心感につながっています。そして、会社の理解は更に進み、今はネッツトヨタ仙台で認知症の普及啓発を仕事としています。仕事の内容は、日本全国で講演活動をしたり、県・市の認知症対策検討委員として政策提案をしています。

このような活動は、認知症を取り巻く環境や地域社会に働きかけること、政策提案することにより、認知症に関する理解を深め社会の仕組みを改善していくためにしています。

認知症の人だからこそ、伝えられることがあります。それは、薬の副作用・生活のしづらさ・社会の偏見など多岐にわたります。私たちの話をみんなが聞くことで、社会が変わってきたと感じています。認知症への理解が進むことで、私たちが暮らしやすくなるということは「誰もが暮らしやすい社会になる」ということです。

また、認知症の人同士だから共感できることがあります。認知症と共に生きるには、生活の工夫が必要です。認知症の症状は人それぞれですが共通することもあります。生活上の工夫や、症状を共有することで、私たちは安心し元気になることができます。認知症の人が元気になり、笑顔になることで、家族の負担も減り、みんなが安心して暮らすことができます。私たちが安心して暮らすことで、社会から偏見が減っていきます。

これらのことは、すべて認知症になった私だからこそできることなのです。

「認知症、笑顔で生きる」

当事者
山田　真由美（やまだ　まゆみ）

おれんじドアも～やっこなごや　代表

私は51歳のときにアルツハイマー型認知症と診断されました。認知症の気づきは字が書きづらくなったり、得意だった計算を間違えるようになったこと、靴下をはくのに時間がかかるようになるなどがありました。受診のきっかけになったのは、友人に年賀状を出した際に、友人が私の字を見てその変化に驚き、心配して受診をすすめてくれたことでした。友人も私に受診をすすめるのは勇気がいったのではないかと思います。おかげで早期診断につながったので、友人には大変感謝しています。

診断後、大きな不安を抱えながら生活していました。近所の人に知られたくないという思いも強くありました。その中で当事者交流会に参加し、同年代の女性当事者と出会ったとき、「ひとりじゃなかった」という思いをもちました。それから地域で自分のことを話すようになりました。地域の人たちに自分のことを話すのは勇気がいることだとは思うのですが、そうすることで、とても楽になりました。認知症になったのは、なにも悪いことをしたわけではありません。当事者の方には、堂々と話して、楽になってほしいと伝えたいです。

丹野智文さんとの出会いも大きなきっかけになりました。丹野さんにおれんじドアのことを教えてもらい、自分もやってみようと、名古屋市西区で「おれんじドアも～やっこなごや」を始めました。当事者にしかわからないことがあります。みんなでワイワイと話をしているだけですが、お互いに共感したり励まし合ったりしています。当事者の方が笑顔になると、私自身も元気をもらえます。講演や出張おれんじドアを通して全国各地の当事者とも出会ってきました。希望のリレーがつながり、広がっています。

現在、私は要介護4になりました。進行は日々感じていますし、自分ひとりでは食事や入浴もできなくなりました。認知症が進行しても、私は私です。周りの人がいてくれることで私らしく笑顔で生活することができています。当事者の方が、つらい思いをするのではなく、周りの人といっしょに、笑顔で生活できる社会になってほしいと願っています。

認知症になっても、地域で仕事や役割をもって生活できるか

当事者
安田　日出子（やすだ　ひでこ）

若年性認知症者の会「レイの会」、若年性認知症サロン「鈴鹿家族みまん。」メンバー

プロフィール

三重県鈴鹿市在住、60歳・女性。教員として勤め、現在は休職中。50代前半に鬱病を患い、平成29年にアルツハイマー病と診断。同年にレイの会に入会する。現在は若年性認知症の当事者として県内外で講演や認知症カフェで活動中。

【本文】

診断を受けたころは、大声で泣いている私の背中を、いつも母がさすってくれました。その時の私は「一生懸命に頑張っているのに、なんで認知症にならなくてはいけないの」と思い、仕事ができなくなった悔しさや悲しさ、憤りなど怒りでいっぱいで、受け入れる事ができませんでした。そんな絶望の中です。弟がレイの会を紹介してくれたのです。私はレイの会に行き、同じ認知症の東さんと磯部さんに出会い、「同じ病気の人がいる、一人じゃないんだ」と思い、私はレイの会に入会しました。

私たちの最初の活動は、認知症カフェの運営でした。古民家を借りてそこでどんなカフェにするか、沙羅のスタッフさんや役所の方と打ち合わせをしました。他にも、手書きの歌詞集や、カフェで使う小物や、ビートルズの曲で「レイの会体操」を作って、準備を進めていきました。そしてカフェ当日は、沢山の人に来ていただき、満員御礼で、カフェが開催されました。

令和2年2月16日、三重県四日市市で「第11回全国若年認知症フォーラム」が開催され、レイの会もスタッフとして参加をしました。しおりやシュシュ、漫画をブースで販売したり、第2ホールで寸劇をしたり、第4ホールで、三重県立看護大学の学生さん達とコラボをし、認知症カフェを開催しました。100人以上の人が来てくださり、コーヒーを楽しみながら、レイの会体操や、歌、ビンゴゲームなどで盛り上がり、とても良いカフェになりました。

現在の私はレイの会の事務局長として、講演や本人ミーティングで、本人としての想いを言葉として伝え、川柳を作って、県内外の人々に若年性認知症の理解を深めてもらう活動も積極的にしています。他にも、認知症の人と家族の会の人や「家族みまん。」の人たちとも出会え、第2の人生を満喫しています。

レイの会では、若年性認知症者本人の交流会として、偶数月の第4土曜日には、四日市のうのもり薬局の多目的室で、レイの会in四日市を行い、三重県内の若年性認知症の方と本人ミーティングを行っています。新たな参加者がいらっしゃると、最初の自分を見ているように感じます。当事者である自分が、同じ立場で、「一人じゃないよ」と伝えています。誰かと

私が繋がっていることが、自分を強くしてくれるし、自分の運命を受け入れながら生きていくことも、できるようになりました。私も、いろいろ話を聞かせてもらいながら、心の整理をしていると感じています。

レイの会のない日は、ウォーキングをしたり、ラジオ体操や、レイの会体操もしています。手も頭も動かすので、目標は、「現状維持」です。前向きに頑張るのがモットーですが、「一旦馬力や」と母に言われるので、ほどほどにしようと思います。困っていることは、遠い所へなかなか行けないことです。今の私は、普段の日常が幸せなんだなぁと、しみじみ思います。人の情けが心に染みて、その人の優しさなども染みてきて、自分も優しくなれると思います。

「認知症当事者とともにつくる地域・社会」

山田真由美さんのパートナー
鬼頭　史樹（きとう　ふみき）

borderless -with dementia-

私は2020年3月まで、名古屋市認知症相談支援センター（名古屋市社会福祉協議会が名古屋市より受託）で、主に若年性認知症の人を支援するソーシャルワーカーとして勤務していました。若年性認知症の人や家族は制度のはざまで多くの困難な状況に直面します。私自身、支援者として力不足を感じる場面も多かったと思います。しかし、そのような状況でも、つどいの場である名古屋市本人・家族交流会「あゆみの会」（以下、あゆみの会）の中では、本人同士、家族同士が、出会い、語り、わかちあい、笑顔になっていく姿、そして認知症とともに生きていくという前向きな姿に多く出会ってきました。山田真由美さんともこのあゆみの会で出会いました。山田さんと当事者の女性が出会ったとき、ふたりがそれまで見たことのない笑顔を見せたことを今でもおぼえています。

それから山田さんとは100回以上におよぶ講演活動、名古屋市西区の「おれんじドアも～やっこなごや」の立ち上げなど活動をともにしてきました。また、山田さん以外のあゆみの会の当事者メンバーとも、中学生とのソフトボール交流などの活動を、本人の「○○したい！」という思いを起点に実現してきました。

活動を通し、当事者が仲間たちとともに、自分の思いを自らの力で実現していくことが、その人の自信につながっていくということだけでなく、その姿が、私も含む地域や社会に大きな学びをもたらしているのではないかということを感じるようになりました。

そのような思いをもっている中で、私自身が職場を異動することになり、それを機に、当事者の経験や思いを起点に、多様な活動を展開するコミュニティとして「borderless -with dementia-」を当事者を含む仲間たちと立ち上げました。コロナ禍が重なったこともあり、現在は毎週オンラインのつどいの場である「borderless bar」を中心に、オンラインの講演やオ

ンラインのピアサポート活動、執筆や研究事業等への参画なども行っています。

当事者とともに活動し、ともに学び合う活動の積み重ねの先に、地域の成熟があります。支える側の人が、支えられる側の人に対し「その人のために」という姿勢ではなく、支える側と支えられる側という立場を超えて「その人といっしょに」という姿勢が必要です。地域共生社会の実現のために、“for”から“with”へのパラダイムシフトが求められえていると考えています。

支援者・専門職

西村　実希子（にしむら　みきこ）

2017年4月～　‘暮らしまるごと相談室’　①合同会社たまきあい　②特定非営利活動法人玉絆　③たまきあい居宅介護保険事業所で社会福祉士・介護支援専門員として勤務。

① 認知症予防教室・認知症家族の会運営、たまきのつどい場「協（かなう）」運営、認知症サポーターさくら事務局、地域支え合い事業（お助けマン・傾聴サポーターあいあい）、権利擁護事業など実施。

② 子育て支援（親子食堂・学習支援）事業実施。

③ ケアプラン作成事業・委託による要介護認定調査実施

前職1999年4月～　介護保険制度が施行される1年前、玉城町役場に入庁。以降、老人福祉、介護保険等担当職員として勤務。地域包括支援センター長を最後に定年退職。

玉城町では認知症サポーター養成講座を受講していただいた方の中で、「認知症の方と一緒に歩んでいきたい」と思われた方に『(認知症）サポーターさくら』の仲間になっていただいています。2020年9月現在104名の仲間がいます。

私はもともと行政の職員でしたが、このサポーターさくら（これからは「さくら」と呼びます）の存在がなければ、玉城町の認知症関連の事業は運営できなかったと思っています。さくらの得意技を5つご紹介します。

1番目の得意技は、認知症かどうかわからないけど、日常の生活に困っている人を見つけることです。あれっ？変だな。老人会の開催日を覚えられない。日に何回も同じものを買いに行っている。同じ服しか着ていない。そういう気づきを放置しないで、すぐさま地域包括支援センターに足を運んで報告してくれることです。

第2の得意技、これが大切なのですが、ちょっと困っている方に何ができるのか、行政職員と一緒に考えてくれることです。

第3の得意技ですが、こうしたらいいんじゃないという提案が出されたとき、「じゃあ、わたし声かけするわ」「誘ってくるわ」と、さくらのメンバーは、自分のできることを見つけて、積極的にかかわりを持ってくれることです。

そうして第4の得意技は、なじみの関係になったその人の傍らにずうっと居続けてくれることです。

5つ目の得意技は、認知症と診断されたその方をもさくらの活動に誘い込んで、仲間として一緒に活動に取り組んでいただき、その人らしく生き続ける機会をつくっていくことです。

まさに、今回の「ともに～忘れても一人ひとりが主人公～」の実践です。

今回のパネルディスカッションでは、地域で今まさに活動を開始しようとしている認知症サポーターの皆さんや、サポーターさんと一緒に活動を実践していく行政の方の事業実施のヒントになればと思っています。

そのために、認知症サポーター養成講座を3回連続講座で実施したりして、認知症の方のために自分でも何かできるのではないかと、意欲を引き出す講座の工夫や、認知症介護予防教室や玉城のつどい場「協」でのさくらと認知症の方とのかかわりの様子、宿泊を伴った旅行ができにくくなってきたご家族との旅行の様子など、さくらの具体的な活動のいくつかをご紹介します。

認知症の人と家族の会　第36回全国研究集会in三重

実行委員会名簿

三重県支部 世話人	氏　　名
代　　表	中　川　絵里子
副 代 表	河　戸　義　男
副 代 表	多　賀　洋　子
世 話 人	田　邊　　寿
世 話 人	鈴　木　さとみ
世 話 人	辻　中　孝　子
世 話 人	中　川　秀　行
世 話 人	下　野　和　子
世 話 人	西　口　和　代
世 話 人	長　島　秀　子
世 話 人	藤　田　慶　子
世 話 人	野　口　美　枝
世 話 人	三　吉　由美子
世 話 人	工　藤　元　貴
世 話 人	中　島　英　子
世 話 人	佐　野　佑　樹
世 話 人	山　路　由実子

外部団体　所属	氏　　名
三重県医療保健部 長寿介護課	林　　美千代
	下　村　孝　枝
	河　合　晶　子
津市健康福祉部 地域包括ケア推進室	工　藤　暢　久
三重県社会福祉協議会	山　崎　和　彦
三重県民生委員 児童委員協議会	速　水　正　美
三重県地域包括・ 在宅支援センター協議会	近　藤　良　子
三重県認知症疾患 医療センター	佐　藤　正　之
	新　堂　晃　大
三重県介護支援専門員協会	奥　田　隆　利
RUN伴三重実行委員会	長谷川　　信
若年性認知症支援 コーディネーター	伊　藤　美　知
三重県文化振興事業団	堤　　佳　奈

公益社団法人 認知症の人と家族の会 支部一覧

🏠のマークがある支部は呼び出しです。
💬のマークがある支部はホームページがあります。
各開室日は祝日を除きます。

支部名	代表者	郵便番号	住　　所	TEL	FAX
北海道	中田　妙子	060-0002	札幌市中央区北2条西7丁目かでる2.7 4F　電話相談（月～金10時～15時） 🏠	011-204-6006	011-204-6006
青　森	石戸　育子	031-0841	八戸市鮫町字居合 1-3 💬 電話相談（水・金13時～15時）	0178-35-0930 0178-34-5320	0178-34-0651
岩　手	内出　幸美	024-0072	北上市北鬼柳22-46 💬 電話相談（月～金9時～17時）	0197-61-5070 0120-300-340	0197-61-0808
宮　城	若生　栄子	980-0014	仙台市青葉区本町3-7-4　宮城県社会福祉会館2F 🏠 電話相談（月～金9時～16時）	022-263-5091	022-263-5091
秋　田	石村　照子	010-0921	秋田市大町1-2-40　秋田桟屋内（月10時３０分～14時）	018-866-0391	018-866-0391
山　形	五十嵐元徳	990-0021	山形市小白川町2-3-31　山形県総合社会福祉センター内 やまがた認知症コールセンター（月～金12時～16時）	023-687-0387	023-687-0397
福　島	佐藤　和子	960-8141	福島市渡利字渡利町9-6	024-521-4664	024-521-4664
茨　城	宮原　節子	300-1292	牛久市中央3-15-1　牛久市保健センター隣り 🏠 電話相談（月～金13時～16時）	029-828-8089 029-828-8099	029-828-8089
栃　木	金澤　林子	320-8508	宇都宮市若草1-10-6　とちぎ福祉プラザ3F（月・水・金） 電話相談（月～土13時30分～16時）	028-666-5166 028-627-1122	028-666-5165
群　馬	田部井康夫	371-0843	前橋市新前橋町13-12　群馬県社会福祉総合センター7F（月～金9時～17時） 電話相談（月～金10時～15時）	027-289-2740	027-289-2741
埼　玉	花俣ふみ代	330-0061	さいたま市浦和区常盤3-12-17　日建プリムローズ常盤第3-1F（電話相談 月～金10時～15時） 若年専用電話相談（月～金9時～16時）	048-814-1210 048-814-1212	048-814-1211
千　葉	合江みゆき	260-0026	千葉市中央区千葉港4-3千葉県社会福祉センター3F（月・火・木13時～16時） 🏠 電話相談・ちば認知症相談コールセンター（月・火・木・土10時～16時）	043-204-8228 043-238-7731	043-204-8256 043-238-7732
東　京	大野　教子	160-0003	新宿区四谷本塩町4-41　住友生命四谷ビル（火・金10時～15時） 🏠 認知症てれほん相談（火・金10時～15時）	03-5367-8853 03-5367-2339	03-5367-8853
神奈川	杉山　孝博	212-0016	川崎市幸区南幸町1-31　グレース川崎203号（月・水・金10時～16時） 🏠 かながわ認知症コールセンター（月・水10時～20時、土10時～16時） よこはま認知症コールセンター（火・木・金10時～16時）	044-522-6801 0570-0-78674 045-662-7833	044-522-6801
山　梨	田村　一貴	400-0005	甲府市北新1-2-12　福祉プラザ3F　コールセンター内（事務所・相談　月・水） 認知症コールセンター（月～金13時～17時）	055-244-2771 055-254-7711	055-244-2771 —
長　野	伝田　景光	388-8016	長野市篠ノ井有旅2337-1 💬 電話相談（月～金9時～12時）	026-292-2243 026-293-0379	026-293-9946
新　潟	金子裕美子	941-0006	糸魚川市竹ヶ花45　金子裕美子方	025-550-6640	025-550-6640
富　山	堀井　隆子	930-0001	富山市明輪町1-242-601　勝田方　（電話相談　夜間毎日20時～23時） 🏠	076-441-8998	076-441-8998
石　川	飯田　芳枝	920-0813	金沢市御所町未10 電話相談（木13時～17時）	070-5146-1025	076-251-8045
福　井	松原　六郎	910-0017	福井市文京2-9-1　嶺北認知症疾患医療センター 電話相談	0776-28-2929 0776-22-5842	0776-63-6756
岐　阜	小森　　薫	502-0017	岐阜市長良雄総字法喜54	058-214-8690	—
静　岡	佐野三四子	416-0909	富士市松岡912-2 認知症コールセンター（月・木・土10時～15時）	0545-63-3130 0545-64-9042	0545-62-9390
愛　知	尾之内直美	477-0034	東海市養父町北堀畑58-1 🏠 認知症介護相談（月～金10時～16時）	0562-33-7048 0562-31-1911	0562-33-7102
三　重	中川絵里子	514-0821	津市垂水2772-75 三重県認知症コールセンター（月・火・木・金・土10時～18時）	059-227-8787 059-235-4165	059-227-8787
滋　賀	小宮　俊昭	525-0072	草津市笠山7-8-138　滋賀県立長寿社会福祉センター内 🏠 フリーダイヤル電話相談（月～金10時～15時）	077-567-4565 0120-294-473	077-567-4565
京　都	荒牧　敦子	602-8222	京都市上京区晴明町811-3 岡部ビル２Ｆ 京都府認知症コールセンター（月～金10時～15時）	050-5358-6577 0120-294-677	075-205-5104
大　阪	神垣　忠幸	543-0033	大阪市天王寺区堂ヶ芝1-2-2　富士ハイツ103号室 🏠 電話相談（月・水・金11時～15時）	06-6626-4936 050-5278-8137	06-6626-4936
兵　庫	熊谷　光子	651-1106	神戸市北区しあわせの村1-10　（月・木10時～17時） 電話相談（月・金10時～16時）	078-741-7707 078-360-8477	078-741-7707
奈　良	屋敷　芳子	631-0045	奈良市千代ケ丘2-3-1（火・金10時～15時、土12時～15時）	0742-41-1026	0742-41-1026
和歌山	梅本　靖子	641-0042	和歌山市新堀東2-2-2　ほっと生活館しんぼり内（事務局・相談10時～15時） コールセンター家族の会（月～土10時～15時）	073-432-7660 0120-783-007	073-432-7661
鳥　取	吉野　　立	683-0811	米子市錦町2-235 電話相談　（土・日10時～18時：携帯電話への転送対応） 🏠 鳥取県認知症コールセンター・若年認知症サポートセンター（月～金10時～18時）	0859-37-6611	0859-30-2980
島　根	黒松　基子	693-0001	出雲市今市町1213　出雲保健センター内（月～金10時～16時） 🏠 島根県認知症コールセンター（月～金10時～16時）	0853-25-0717 0853-22-4105	0853-31-8717
岡　山	安藤　光徳	700-0807	岡山市北区南方2-13-1　岡山県総合福祉・ボランティア・NPO会館　電話相談（月～金10時～15時） 🏠 おかやま認知症コールセンター（月～金10時～16時）	086-232-6627 086-801-4165	086-232-6628
広　島	村上　敬子	734-0007	広島市南区皆実町1-6-29　県健康福祉センター3F（事務所・相談　月・水10時～16時） 🏠 広島市認知症コールセンター（月・水12時～16時） 相談室　広島県健康福祉センター内（火13時～16時30分）	082-254-2740 082-254-3821 082-553-5353	082-256-5009
山　口	川井　元晴	753-0813	山口市吉敷中東1-1-2　電話相談（月～金10時～16時）	083-925-3731	083-925-3740
徳　島	大下　直樹	770-0943	徳島市中昭和町1-2　徳島県立総合福祉センター1F 🏠 徳島県認知症コールセンター（月～金10時～16時）	088-678-8020 088-678-4707	088-678-8110 088-678-4707
香　川	松木香代子	761-0122	高松市牟礼町大町2555-2 🏠	087-823-3590	087-813-0832
愛　媛	森川　　隆	790-0843	松山市道後町2-11-14 電話相談（月～金10時～16時）	087-823-3590	087-845-4418
高　知	楠木　　司	780-0870	高知市本町4-1-37　高知県社会福祉センター内 電話相談（コールセンター家族の会 月～金10時～16時）	088-821-2694 088-821-2818	088-821-2694 088-821-2818
福　岡	栁　　竜一	810-0062	福岡市中央区荒戸3-3-39　福岡市市民福祉プラザ団体連絡室 （火・木・金 10時30分～15時30分　第三火曜を除く） 福岡県認知症介護相談（水・土11時～16時） 福岡市認知症介護相談（木・第2日13時～16時）	092-771-8595 092-574-0190 0120-851-641	092-771-8595
佐　賀	森　久美子	840-0801	佐賀市駅前中央1-9-45　大樹生命ビル4F　保険医協会内 💬 佐賀県認知症コールセンター（月～金10時～16時）	0952-30-8704 0952-37-8545	0952-30-8704 0952-23-5218
長　崎	神原千代子	852-8104	長崎市茂里町3-24　長崎県総合福祉センター県棟4F（火・金10時～16時）	095-842-3590	095-842-3590
熊　本	本山さつき	860-0845	熊本市中央区上通町3-15　ステラ上通ビル3F（水曜日除く毎日9時～18時） 🏠 電話相談（熊本県認知症コールセンター　水曜日除く毎日9時～18時）	096-223-5164 096-355-1755	096-223-5164 096-355-1755
大　分	中野　洋子	870-0161	大分市明野東3-4-1　大分県社会福祉介護研修センター内　（火～金10時～15時） 🏠	097-552-6897	097-552-6897
宮　崎	川辺　清人	880-0014	宮崎市鶴島2-9-6　みやざきNPOハウス203号室 電話相談（月～金9時～16時）	0985-22-3803	0985-41-4810
鹿児島	藤﨑えり子	890-8517	鹿児島市鴨池新町1-7　鹿児島県社会福祉センター2F 電話相談（月～金10時～16時）	099-251-3928 099-257-3887	099-251-3928
沖　縄	鈴木　伸章	904-2241	沖縄県うるま市兼箇段1327-1　仲里宏淳方 💬	098-989-0159 （仲里）	098-989-0159

本　部	鈴木　森夫	602-8222	京都市上京区晴明町811-3 岡部ビル2F フリーダイヤル電話相談（月～金10時～15時）	050-5358-6580 0120-294-456	075-205-5104

個人協賛一覧

神　崎　有　子
小　林　恵　子 （メナード）
小　林　順　子
野　田　啓　子
村　林　美智子
横　山　幸　司

（掲載は50音順とさせて頂いています。）

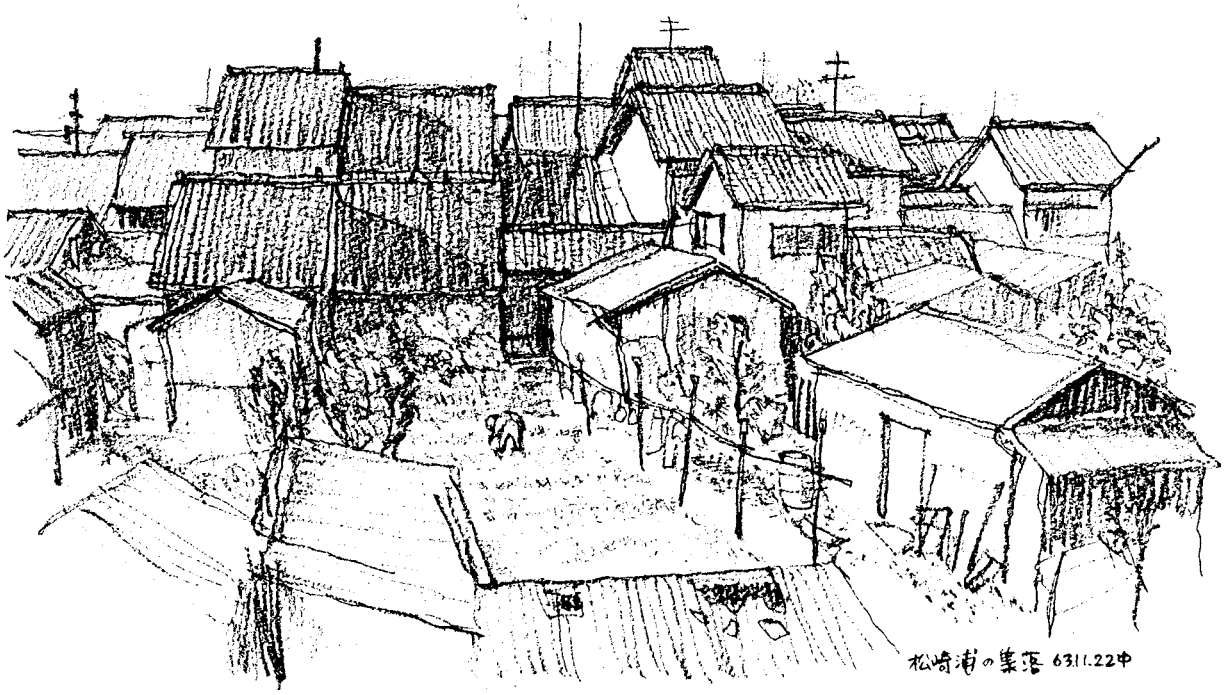


イラスト 「家族の会」三重県支部顧問　中　祐一郎

社会福祉法人 あけあい会

理　念

「愛情と誠意を基調とした福祉サービスに努める」

◇介護に関するご相談を承ります。お気軽にご相談下さい！
◇職員募集　介護士・理学療法士・作業療法士・運転手・
介護助手・リハサポーター等

お問い合わせ
〒514-0825　津市緑が丘一丁目 1−1
法人事務局　☎ 059−239−1000

第 36 回 全国研究集会 in 三重

開催を心よりお慶び申し上げますと共に、関係者の皆様、ご参加の皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げます。

社会福祉法人　ウェルケア

本部　☎ 059−221−0555
津橋北デイサービスセンター「サポート」
デイハウスひょうたん池
特別養護老人ホーム　伊勢あさま苑



ウェルフェアグループ

Welfare

三重県伊勢市黒瀬町 865-1
TEL 0596-21-1133

グループホーム・介護付有料老人ホームくらたやま
グループホーム・小規模多機能ホームふたみ
介護付有料老人ホームウェルガーデンみその
小規模多機能センターみその　グループホームたんぽぽ
地域密着型介護付有料老人ホームみっかいち
介護付有料老人ホームみなみいせ
特別養護老人ホームウェルハート明和

uniserv

株式会社 魚国総本社

おいしいをもっと。すこやかをずっと。
Design food for your life



三重支社
〒510-0885　四日市市日永1-2-20
TEL.059(346)1112

NPO 法人

エールの会

だれもが安心して暮らせる
まちづくりをめざして

〒515-0811　松阪市塚本町 3-1
TEL・FAX　0598−30−4228　ひだまり
E メール　yellnokai2006@kmj.biglobe.ne.jp

医療法人社団 嘉祥会

アコラス
明日につなげる笑顔の介護

介護老人保健施設
第二嘉祥苑「アコラス」

入所・通所・訪問リハビリ

三重県多気郡明和町南藤原751
TEL　0596-55-5550

訪問介護・障がい者福祉サービス・福祉タクシー

ケア 24 ひかり

ヘルパーさん随時募集中です！

〒514-0022　三重県津市愛宕町 131
TEL 059-273-5970/FAX 059-273-5971

（運営会社）島上株式会社
〒514-0008　三重県津市上浜町 6 丁目 207-12

あなたの介護の不安を安心に

居宅介護支援事業・特定相談支援事業

NPO法人 ケアプランセンターあすか

三重県熊野市久生屋町 573

☎ 0597（88）2077　Fax（88）2078

K2

川　田　喜久雄

感謝と気概

ケーツー　内装工事・インテリア全般

〒514-0315　三重県津市香良洲町5127

TEL·FAX　059-292-2115

E-mail　k2-kawata@salsa.ocn.ne.jp

地域高齢者の未来を考える

社会福祉法人こしば福祉会

介護老人保健施設トマト

☎ 059-237-5050 📠059-237-5650

サービス付き高齢者向け住宅

有料老人ホームさくら

☎ 059-273-5531 📠059-273-5532



サービス付き高齢者向け住宅

GOLD AGE ゴールドエイジ

全国に39棟1,696戸の運営実績！

介護でお困りの方・ご相談がある方は、いつでもお気軽にご連絡ください。

0120-802-303

本社所在：〒450-0002 愛知県名古屋市中村区名駅三丁目11番22号IT名駅ビル1階

美味しさで笑顔と元気を届けます

お弁当 まごころ膳

青空 食事配達サービス

特定非営利活動法人　在宅支援サービス青空

デイサービス　訪問介護　居宅支援

在宅療養支援病院

桜木記念病院

内科・小児科・皮フ科・リハビリテーション科

人間ドック・健康診断

居宅介護支援センター・訪問看護ステーション

ヘルパーステーション

〒515-0034　松阪市南町 443-4

TEL 0598-21-5522

HEARTLAND SHIGISAN GROUP

UENO HOSPITAL

やさしく、あたたかく。

ゆったりと、落ち着いた環境を。

患者様の気持ちになって。

地域社会に貢献する人に優しい施設を目指し上野病院は、患者様により快適な環境で医療福祉サービスの実践に取り組んでいます。

〒518-0823　三重県伊賀市四十九町 2888 番地

一財）信貴山病院分院上野病院

TEL　0595-21-5010

炭焼きうなぎ

鰻 新玉亭（しんたまてい）

〒514-0036

津市丸之内養正町５番１号

TEL〈059〉224-0008㈹

FAX〈059〉226-3010

http:www.shintamatei.co.jp



営業時間／平日…午前11：00～午後２：00

午後４：00～午後８：00

土・日・祝…午前11：00～午後８：00

定休日／毎週月曜日

一般社団法人　遺品整理士認定協会　優良事業所認定
生前整理・遺品整理・特殊清掃・古物商
一般廃棄物収集運搬業・除菌消臭作業など

見積もり無料！
まずは、ご連絡お待ちしております。

☆ 株式会社 スタート ☆

〒515-0045　三重県松阪市駅部田町 1002-3
TEL 0598-31-2564　FAX 0598-31-2564
メール　Stat.0721.33@gmail.com



社会福祉法人 洗心福祉会



sensin　夢と希望を創造する。　sensin 検索

住みよい暮らしを
介護/バリアフリーリフォーム
東海装備　有限会社
代表取締役　梅田　靖史
三重県津市海岸町13-30
TEL：059-228-4312

認定NPO法人ときわ会
ちゃんの家
・配食、お惣菜販売
・学童保育
・障がい児日中一時支援
・ホームホスピス
・認知症カフェ、こども食堂
〒516-0041　三重県伊勢市常磐2丁目10−12



社会福祉法人　白壽会



老人デイサービス
豊野みかんの里（45名）
サテライト事業所「たちばな庵」（10名）

住 所）三重県津市一身田豊野 1659
電 話）059-236-5600
FAX）059-236-5617

社会福祉法人　はまゆう会

特別養護老人ホーム
フルハウス

〒514-0315　三重県津市香良洲町1990
電話 059-292-4888　FAX 059-292-2320

高齢になっても
障がいを持っても
生き生き暮らせる地域を
サービス付高齢者住宅 ふるさとの家
デイサービス ふるさと
鈴鹿市算所3丁目21−23
電話:059−389−6565



クロス　カーテン　床材　各メーカー取扱
設計・施工　インテリアリフォーム

株式会社ベスト・商会

嬉野神ノ木町1468-3
☎42-8820　FAX42-8821

株式会社　前川商店

環境マネジメントシステム
ＩＳＯ１４００１認証取得

代表取締役　桑　名　研　二

〒514-0817
三重県津市高茶屋小森町大新田 2892-100
TEL 059−234−5411（代）
FAX 059−234−5412

ショートステイ「柿の葉」

居宅介護支援事業所「柿の葉」

〒519-0427
三重県度会郡玉城町宮古字細谷 2331 番地 1
TEL　0596−58−1197
FAX　0596−58−1199

やっぱりおいしい
ミエライス

株式会社 ミエライス
津市庄田町1957番地
Tel.059-256-0311
http://www.mierice.co.jp

MISATO HILLS

特別養護老人ホーム美里ヒルズ
〒514-2113　三重県津市美里町三郷430番地
TEL　059-279-5100　FAX　059-279-6116

みやはら
鍼灸整骨院
059-213-6630

〒514-0815 三重県津市藤方1231-1
www.miyahara-sinkyuseikotsu.com



株式会社　ゆ　う

有料老人ホーム　宮古ヒルズ
小規模多機能型居宅介護　玉城
サテライト型小規模多機能ホーム　つどい

〒519-0427 三重県度会郡玉城町宮古 2329-4
TEL 0596-58-0700　FAX 0596-58-0707



地域に根ざす介護のトータルカンパニー
株式会社ライフ・テクノサービス
〒514-0032 三重県津市中央4-19 LTS中央ビル
☎ 059-226-8219　https://www.life-techno.jp/

社会福祉法人

憩いの汀



憩いの汀Ⅰ（デイサービス 居宅介護支援）
〒514-0013　三重県津市海岸町 14-20
ＴＥＬ　０５９－２２７－４７０５
ＦＡＸ　０５９－２２７－５５３３

憩いの汀Ⅱ（デイサービス）
〒514-0012　三重県津市末広町 5-45
ＴＥＬ　０５９－２２５－１００１
ＦＡＸ　０５９－２２５－１１００

E-mail：zbh23dpv@za.ztv.ne.jp

三重県伊勢市の高齢者福祉施設

社会福祉法人　伊勢医心会

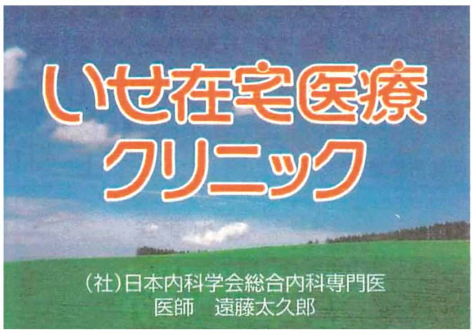


特別養護老人ホーム
デイサービスセンター　神 路 園

〒516－0065
伊勢市二俣町５７７番地９
ＴＥＬ　0596－22－6010

伊勢市養護老人ホーム　万亀会館

〒516－0065
伊勢市二俣町５７７番地１
ＴＥＬ　0596－24－5052



		月	火	水	木	金	土	日
午前	8:30~12:00 外来	○	○	○	-	○	○	-
午後	往診 (訪問診療)	○	○	○	-	○	○	-

【診療案内】
診療科目　:内科・心療内科・精神科
休診日　:木曜日・日曜日・祝日
駐車場　:7台完備

訪問診療を行い，24時間往診可能
☎0596-20-8104
FAX0596-20-8105

〒516-0805
三重県伊勢市御薗町高向927
ホームページ　http://isezaitaku.com/

自宅での人生を最期まで支援します
医療は生活を支えるためにこそあります。必要な医療を受けるために、新たに犠牲にするものがないように、ご本人・ご家族と共に考え、実行したいと思います

虹の夢 グループ

株式会社　伊勢ライフケア
サービス付き高齢者向け住宅
癒しの郷　翠龍



住所：三重県度会郡玉城町蚊野2155番地
TEL：0596-59-7700　FAX：0596-59-7701



人の出逢いを大切に
伊藤印刷株式会社 松阪支店・鈴鹿支店・伊賀支店

〒514-0027 三重県津市大門 32-13
TEL:059-226-2545(代)／FAX:059-223-2862
E-mail : ito-pto@ztv.ne.jp https://ito-pto.jp

ISMS-AC ISMS IS622 ISO / IEC 27001
ISO 27001 情報管理国際認証取得
適応範囲 本社・久居工場

CSR P−00061 全印工連 CSR認定

GREEN PRINTING JPPI F-B10216 本社・本社工場
本工場は、環境に配慮したGP認定工場です。

心療内科　うの森クリニック

〒510-0074　三重県四日市市鵜の森１丁目３番２号
第２ヤマジビル 2F
TEL：059−384−5235　FAX：059−354−5600

自動車整備・車検
鈑金塗装
新車中古車販売
福祉車両販売・修理
傷害保険代理業

地球に人に環境にやさしい自動車整備

まごころ工房

Car Service Chubu

中部運輸局指定民間車検工場
株式会社カーサービス中部
〒514-0305 三重県津市雲出島貫町920−1
TEL.059-238-2111 FAX.059-238-2112
https://www.c-chubu.jp



自分史・記念誌のご用命は関西共同印刷所まで
関西共同 株式会社関西共同印刷所
〒531-0076 大阪市北区大淀中3丁目15-5
Tel.06-6453-3651 Fax.06-6452-4980
http://www.kansai-kyodo.jp/

祝開催　第36回 全国研究集会 in 三重

一般社団法人　津共和福祉会　代表理事 小倉 亨

○ 老人短期入所施設　『 渋 見 苑 』 介護福祉士　　７名
○ 居宅介護支援事業所『 渋 見 苑 』 ケアマネージャー　３名

思いやり・やさしさ・感謝の気持ち・親切をモットーに

〒514-0063　三重県津市渋見町 42-1
☎ 059-273-5777　📠 059-273-5782

地域密着型通所介護事業所
宅老所　紫苑
〒511-0251
三重県員弁郡東員町大字
山田1055番地
TEL*0594-76-4220

認知症対応型通所介護事業所
宅老所　第2紫苑
〒511-0251
三重県員弁郡東員町大字
山田1055番地
TEL*0594-86-1133

デイサービス　第3紫苑
〒511-0242
三重県員弁郡東員町大字
六把野新田661番地
TEL*0594-84-6110

デイサービス　第3紫苑
サテライトMen's.
〒511-0242
三重県員弁郡東員町大字
六把野新田字藪之内140番地7
TEL*0594-86-1700

居宅介護支援事業所
紫　苑
訪問看護スマイルステーション
紫　苑
〒511-0242
三重県員弁郡東員町大字
六把野新田字藪之内140番地7
TEL*0594-76-0783

訪問介護　紫苑
自費サービス
紫苑のおせっ介
サービス付き高齢者
向け住宅（サ高住）
紫　苑
〒511-0242
三重県員弁郡東員町大字
六把野新田字村中711番地3
TEL*0594-76-0600

笑顔＆
ありがとう！！



特定非営利活動法人
小規模多機能サービス
宅老所紫苑

認知症の方の住み慣れた地域での生活を支えます！
グループホーム・小規模多機能ホーム

と の む ら

〒514-0073　三重県津市殿村 1553 番地
TEL 059-237-3450 / FAX 059-237-3485
http://tonomura-web.com/



家事代行・生活支援のプレシャス

〒514-0015　津市寿町 14-16
TEL 059-213-3717 / FAX 059-213-3727
http://precious39life.com/

グループホーム　渚 園

〒514-0803　柳山津興 382-4

Tel：059−227−7737 ／ Fax：059−225−9192

『その人がその人らしく生活するために』

認知症対応型共同生活介護／認知症対応型通所介護

グループホームはなの家

入居者募集中

三重県亀山市関町木崎１２３４

株式会社ソウセン　代表取締役　坂倉英樹

電話：０５９５－９６－０２１７

（はなの家）（日本認知症GH協）

住まい探しは ハトマーク

ひまわり不動産販売

〒514-0821　三重県津市垂水 2772－75

TEL：059-224-8832　FAX：059-223-1744

全国宅地建物取引業協会会員　全国賃貸不動産管理業協会会員

三重県知事（6）2436 号　宅建ファミリー共済保険

宅地建物取引士三重 NO.4701　宅建キャリアパーソン

住まい探しは ハトマーク

空き家・空地の草刈り・家財の片付けなど　お手伝いします。





三重県伊勢市上地町 3130 番地　**社会福祉法人福徳会**　三重県伊勢市上野町 3088-1

白百合園通所介護事業所　通所リハビリセンター上野の郷

☎ 0596-27-1511　☎ 0596-39-8088

一般社団法人　三重県介護支援専門員協会

三重県内９つの支部で活動中！　新規ご入会お待ちしています

2020 年 8 月 31 日現在　会員数 1,236 名

〈事務局〉

三重県津市桜橋２丁目 131 三重県社会福祉会館１階

電話 059-213-7766 FAX 059-213-7765

ホームページ http://mie-cma.com/

Mie Care Manager Association




2019 マイハピネス フォトコンテスト 応募作品「みんな楽しいハンバーグ作り」（林澄里さま・神奈川県）

明治安田生命

いろいろな体験をして、
やりたいことをみつけてほしい。

明治安田生命 2020マイハピネス フォトコンテストへの
ご応募お待ちしております。

津支社
〒514-0009 三重県津市羽所町375 百五·明治安田ビル8F
TEL 059-228-0361　FAX 059-228-8356



スマイルケア食 エネルギー・たんぱく質の補給に

【スマイルケア食について】

農林水産省では、介護食品の市場拡大を通じて、食品産業、ひいては農林水産業の活性化を図るとともに、国民の健康寿命の延伸に資するべく、これまで介護食品と呼ばれてきた食品の範囲を整理し、「スマイルケア食」として新しい枠組みを整備しました。
「スマイルケア食」は、健康維持上栄養補給が必要な人向けの食品に「青」マーク、噛むことが難しい人向けの食品に「黄」マーク、飲み込むことが難しい人向けの食品に「赤」マークを表示し、それぞれの方の状態に応じた「新しい介護食品」の選択に寄与するものです。【出典:農林水産省Webサイト（http://www.maff.go.jp）】

弊社商品の「高カロリー豆腐」は、農林水産省発行のスマイルケア食「青マーク」の利用許諾を得ています。

おいしい！の笑顔をつくる
井村屋株式会社

府洲グループ

○ 医療法人府洲会「介護老人保健施設ロマン」

◆在宅復帰強化型施設としてリハビリ強化中！
◆リハビリスタッフ 15 名常駐！
◆安心の 24 時間看護体制！
◆施設医師が常駐　館内で診察・処方可！

TEL：059−265−6500

○ 社会福祉法人いろどり福祉会「花紬」

◆在宅生活を応援！
◆デイサービス、訪問介護、ショートステイ、居宅介護支援事業所が併設されています！
◆ケアハウス 30 床あります！

TEL：059−265−6600

○ 株式会社アールビーサポート「安濃津ろまん」

◆国内最大級！240 床のサービス付き高齢者向け住宅
◆要支援 1 ～要介護 5 の方が対象
◆協力医療機関あり！
◆館内にコンビニ、理美容室、子育てひろば併設！
◆併設介護サービス事業…訪問介護、訪問看護、デイサービス、福祉用具貸与、居宅介護支援事業所

TEL：059−213−4165

○ 株式会社アールビーサポート「昭和ろまん」

◆安心の「介護付き有料老人ホーム」70 床！
◆24 時間看護師常駐！
◆理学療法士による専門的リハビリ！
◆ショートステイもあります！
◆充実のイベント活動！

TEL：059−265−6510

○ 株式会社　食彩浪漫

◆各施設ご利用者の給食サービスを提供！刻み食や療養食など幅広く対応します！
◆在宅にお住いの高齢者の方々にお弁当を配達します！（市補助制度あり！）

・津市神戸 154-9（059−213−4141）　・津市芸濃町椋本 6177-1（059−265−6030）

○ 株式会社　府洲ホールディングス

※介護士、看護師、栄養士、ケアマネージャー、障がい者雇用など募集中！お気軽にお問い合わせください。





祝　第36回　全国研究集会 in 三重

社会福祉法人
高田福祉事業協会

〒514-0122　津市大里野田町字宮下 1124－1
☎ 059－230－7811　fax　059－230－3878
http://www.takada-fukushi.jp/

養護老人ホーム	高田慈光院
特別養護老人ホーム	高田光寿園
軽費老人ホーム	高田ケアハウス
保育所	高田保育園
診療所	高田附属診療所
短期（ショートステイ）	高田光寿園
通所介護（デイサービス）	高田デイサービスセンター
訪問介護（ホームヘルプ）	高田訪問介護事業所
居宅介護支援事業所・在宅介護支援センター	

☆‘暮らし’まるごと相談室・居場所「協（かなう）」運営

合同会社　たまきあい（認知症地域支援推進員常駐）

☆親子食堂‘田丸食堂’・学習支援‘かな塾’開催

特定非営利活動法人玉絆（たまきずな）

☆悩んでいるならお話しください

たまきあい居宅介護支援事業所

たまきあいの【あい】には、「愛」「相（互いに）」「逢い（めぐりあい）」「会い（向き合う）」「合い（マッチング）」「の思いを込めています。

〒519-0415　三重県度会郡玉城町田丸 1 番地
TEL 0596−58−2251　FAX 0596−72−8251
info@tamakiai.co.jp　https://tamakiai.co.jp

50年余りの実績!!

土地・建物の売買・仲介・リース！

相続・信託も専門家が対応！

不動産免許知事 14-529

原田土地開発株式会社

〒514-0007
三重県津市大谷町181番地（津駅西ビル1F）
TEL 226−7777（代表） FAX 226−7771
http://www.h-7777.com/

YOSHIDA
Welfare Found Foundation

「 安心とゆとりのために 」

当財団は、個人の醸出資金を基本財産として、三重県内の老人福祉ニーズに対応する老人福祉施設、民間組織などの老人福祉活動に助成を行い、安心とゆとりある地域社会をささえています。

一般財団法人吉田福祉基金理事長 吉 田 逸 郎



一般財団法人 吉 田 福 祉 基 金

〒519-2183 三重県多気郡多気町四疋田588-5 TEL 0598-38-8096 FAX 0598-38-8098

Eメール yosifuku@me.mctv.ne.jp

郷土三重が誇る
食のブランド松阪肉



ISO 9001:2008 認証取得

名　産　松　阪　肉

朝日屋

〒514-0031 三重県津市北丸之内 20
TEL(代)059-226-2983（ニクヤサン）
FAX 059-225-2983
営業時間 AM9:00～PM6:00 ※水曜定休
http://www.asahiya.net/
朝日屋　検索



すき焼き しゃぶ
松重
〒514-0009
三重県津市羽所町381番地
三交ビルディングアネックス1階
TEL 059-229-0298



焼とり 鳥さわ
〒514-0009
三重県津市羽所町381番地
三交ビルディングアネックス2階
TEL 059-229-0299



名　産　松　阪　肉
朝日屋
Restaurant ASAHIYA
〒511-1135
三重県桑名市長島町浦安368
三井アウトレットパーク
ジャズドリーム長島
2階　11110（店舗番号）
TEL 0594-41-2983



命を明日につなぐ。希望は世界中にある。

課題と国境を越えて、人々の明日をひらく製薬会社、ヤンセンファーマ。

世界のすべてが、私たちの研究室。
病と懸命に闘う患者さんのために、
高い科学技術、独創的な知性、
世界中の力を合わせ、新しい可能性を切り拓く。

すべては、私たちの解決策を待つ、ひとつの命のために。
複雑な課題にこそ挑んでいく。
新しい薬を創るだけではなく、それを最適な方法で提供する。

革新的な薬や治療法を、届ける。
世界中に、私たちを待つ人がいる限り。

誰もが健やかに、いきいきと暮らす社会。
そんな「当たり前」の願いのために、
自ら変化し、努力を続けます。

Janssen
PHARMACEUTICAL COMPANIES OF
Johnson & Johnson

ヤンセンファーマ株式会社
www.janssen.com/japan
www.facebook.com/JanssenJapan

本人の心の声を届けたい



認知症フォーラム.com



認知症のいまとこれからを 介護 医療 くらし の視点で動画と記事で解説
認知症専門医、福祉ジャーナリスト、編集部員が最新ニュースを解説します

見て、聞いて、読んで、認知症の人の心を知ってください

認知症フォーラムドットコム 検索 www.ninchisho-forum.com



Eisai

hhc
human health care

患者様の想いを見つめて、薬は生まれる。

顕微鏡を覗く日も、薬をお届けする日も、見つめています。
病気とたたかう人の、言葉にできない痛みや不安。生きることへの希望。
私たちは、医師のように普段からお会いすることはできませんが、
そのぶん、患者様の想いにまっすぐ向き合っていたいと思います。
治療を続けるその人を、勇気づける存在であるために。
病気を見つめるだけではなく、想いを見つめて、薬は生まれる。
「ヒューマン・ヘルスケア」。それが、私たちの原点です。

ヒューマン・ヘルスケア企業 エーザイ

AFUTUREFREEOFLF
GlobalAlliance
エーザイはWHOのリンパ系フィラリア病制圧活動を支援しています。